第2章

長野市の維持及び向上すべき歴史的風致

1 ❖ 歴史的風致に関する概要、分布状況

歴史的風致とは、歴史まちづくり法第１条において、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動と、その活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地が一体となって形成してきた良好な市街地の環境」と定義されている。

本市は、周囲を美しい山並みに抱かれる中、古くから善光寺の門前町として栄えるとともに、市域のほぼ中央で千曲川と犀川が合流して沿川に形成された肥沃な長野盆地（善光寺平）を中心に発展した都市部と山間部の双方を併せもった都市である。戦国時代には、武田信玄と上杉謙信に代表される有力者の争いの場となった。

江戸時代になると松代は、信濃の国最大の石高を有する松代藩の城下町として独自の文化と城下町が形成されて繁栄した。加えて、松代城下を通る松代道（まつしろみち）も商品流通が活発になるにしたがって発展し、複数の宿場が形成された。また、松代の大室（おおむろ）には、５世紀前半から８世紀にかけて築造された500余基の古墳からなる大規模古墳群があり、その周辺にも数多くの遺跡が確認できることから、この地を含む長野盆地には、古代から広域の緩やかな地域的政治圏が形成されたとみられている。

山間部には、善光寺と同じく県内外に広がった戸隠信仰の中心である戸隠がある。戸隠は、古代以降、天台密教や真言密教と神道とが習合した神仏混淆の聖地となっていた。江戸時代、善光寺参詣に訪れた人々の中には戸隠まで足を延ばす人も多く、善光寺と戸隠を結ぶ信仰の道は、戸隠古道として多くの参詣者が往来した。戸隠信仰の歴史は古く、戸隠山顕光寺（けんこうじ）を中心にした山岳信仰に、農業神として庶民の信仰を集めていた九頭龍権現（くずりゅうごんげん）に代表される神道が一体化したことで、独自の文化やそこで生きる人々の生業（なりわい）が成熟した。また、鬼無里（きなさ）は、近世から近代にかけて麻の栽培が盛んとなり、麻産業で栄えると同時に、山間地の交通要路の分岐点として、九斎市（くさいいち）（１カ月に９回開かれた定期市）が開かれ、物流や交易の場として繁栄した。

このように本市には、善光寺を中心に平安時代末期以降の浄土信仰の広がりとともに門前町として発展した都市形成の歴史があるほか、城下町や街道の繁栄とともに歴史的、文化的に発展した地域がある。各地域のまちの形成やそこで生活する人々の営みを礎に、地域固有の歴史と伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史的価値の高い建造物が一体となった歴史的風致が形成され、今日まで継承されている。

ついては、本市の維持及び向上すべき歴史的風致として７つを取り上げ、それぞれに建造物、人々の活動を主として以降で整理する。

2 ❖ 歴史的風致の内容

(1) 善光寺御開帳にみる歴史的風致

ア はじめに

善光寺の創建について、平安時代末期に記された『扶桑略記』（寛治８年(1094年)）所収の『善光寺縁起』によると、欽明天皇13年(552)に百済から伝えられた阿弥陀三尊を本尊とし、当初現在の長野県飯田市で祀られていたものを皇極天皇元年(642)に現在地に遷座し、同３年(644)には伽藍が造営され「善光寺」と名付けられたとされている。

善光寺の名は、貴族のあいだに阿弥陀如来の極楽浄土に往生を願う浄土信仰が広がるとともに、中央の貴族社会や仏教界で知られるようになった。また、善光寺は、天台宗寺門派の本山である園城寺（おんじょうじ）の末寺となり、本寺の僧の中から別当が選任されている。関白藤原師通が永保３年(1083)から康和元年(1099)年までの朝廷の政務や儀式などを記した日記とされる『後二条師通記』の永長元年(1096)３月の条に、興福寺、西大寺、法隆寺における別当の名が記されるとともに、頼救阿闍梨（あじゃり）が善光寺別当になることが記されており、これが善光寺別当に関する初見記事である。

善光寺信仰は、平安時代末期以降の浄土信仰の広がりとともに、急速に全国的な広がりをみせ、阿弥陀信仰の霊地として善光寺の名声が知れわたることとなる。また、多くの善光寺聖が御本尊の分身仏とともに全国各地を巡り、善光寺縁起を説きながら善光寺如来への信仰を人々に根付かせた。さらに、鎌倉時代以降、末法思想の広がりとともに、鎌倉幕府の善光寺保護政策により、治承３年(1179)に焼失した善光寺の再建が行われるほか、全国各地で有力御家人を檀那とした新善光寺の建立や善光寺仏の模造が流行し、鎌倉時代後期には全国各地に新善光寺が勧請され、善光寺信仰は全国に広がった。

全国から善光寺への参詣人の増加に伴って参詣路も発達した。『一遍聖絵（いっぺんひじりえ）』（正安元年(1299)）、『遊行上人絵伝』（徳治２年(1307)までに制作）は、文永年間に再建された善光寺や門前の賑わいを伝えている。また、『大塔物語（おおとうものがたり）』（応永７年(1400)）に「善光寺の南大門および裾花川の高畠に履子を打つ所なし」と門前の賑わいが記されている。

門前の住人は、大工、仏師、絵師、遊女、琵琶法師、絵解き法師など善光寺如来に直接結縁して世俗を脱した人々で、農村とは異なった町の世界が善光寺門前に展開していた。室町時代には、善光寺信仰と戸隠・飯縄信仰が一体となり、多くの参詣者を集めた。

こうした歴史的な経緯をもつ善光寺において、近年数え年で７年に一度ごと丑の年と未の年に催されるのが、善光寺前立本尊（まえだちほんぞん）御開帳である。一般に御開帳とは、通常閉鎖されている仏殿の扉を開いて参拝するものであるが、善光寺の本尊である一光三尊（いっこうさんぞん）阿弥陀如来は、古くから絶対秘仏とされていることから、御開帳のときに人々が目にすること

ができるのは、本尊の身代わりとなる前立本尊（まえだちほんぞん）である。

善光寺の御開帳には、他国に出て行う出開帳と善光寺で行う居開帳があり、このうち居開帳が現在主に行われている御開帳である。居開帳は、念仏堂で行われた不断念仏の節目を記念すること、出開帳を終えた如来を慰労すること、堂塔の造営や修築を記念することなどを目的に実施されてきた。近年では、長野商工会議所などで構成する奉賛会が、善光寺に開帳の申し入れを行う形になっており、善光寺信仰に加え、商業、観光振興の要素も大きくなってきている。

記録の残る最初の居開帳は享保15年(1730)で、善光寺宿問屋『小野家日記』に「如来御入仏以後の群衆なり」と大いに繁盛したと記されている。また、居開帳の様子が分かる史料として、弘化４年(1847)の善光寺大地震における居開帳の絵図(『永井家文書』(嘉永元年(1848))長野市指定有形文化財)に華やかな居開帳が描かれている。

江戸時代の居開帳は、享保15年(1730)から幕末にかけて十数回行われていたものの、不定期の開催であった。現在のように数え年で７年に一度と定期的に実施されるようになったのは、明治15年(1882)以降であり、太平洋戦争による混乱期を除いて現在まで途絶えることなく行われている。

「如来御遷座参詣群集之図」『永井家文書』(嘉永元年(1848)、長野市指定有形文化財)

イ　建造物

（ア）　善光寺

善光寺は、特定の宗派に属さない無宗派で、全ての人々を受け入れる寺として知られている。

a　善光寺本堂（国宝）

現在の本堂は、宝永４年(1707)に再建され、正面の柱間５間に対し、側面の桁行14間と縦長の建物で、建坪も国宝建造物の中で東日本最大級の大きさである。その平面は、外陣、内陣、内々陣が設けられ、屋根は総檜皮葺（ひわだぶき）で撞木造（しゅもくづくり）という独特な形式である。

善光寺本堂（宝永４年（1707）、国宝）

b　善光寺三門（重要文化財）

三門（山門）は、寛延３年(1750)の建立で、本堂の正面に位置し、柱間が５間で戸が３つの木造二階建、、入母屋造の二重門で、中央３間が通路になっている。また、屋根は、大正年間の葺き替え工事で檜皮葺（ひわだぶき）となっていたが、平成の大修理でサワラ板を用いた栩葺（とちぶき）に復元されている。

善光寺三門
（寛延３年（1750）、重要文化財）

c　善光寺経蔵（重要文化財）

経蔵は、宝暦９年(1759)の建立で、本堂の西側に位置し、柱間が５間四方の建物で、屋根は宝形造の檜皮葺（ひわだぶき）である。内部は石敷で、中央に一切経が収められた八角形の輪蔵がある。

善光寺経蔵
（宝暦９年（1759）、重要文化財）

d　善光寺仁王門（登録有形文化財）

仁王門は、宝暦２年（1752）に再建されたものの、弘化４年（1847）の善光寺大地震及び明治24年（1891）の大火により焼失した。現在の仁王門は、大正７年（1918）に再建されたものである。柱間が３間、戸が１つの八脚門で、屋根は切妻造銅板葺で、正面に唐破風をもつ。

善光寺仁王門
（宝暦２年（1752）、登録有形文化財）

e　善光寺鐘楼（登録有形文化財）

本堂の南東にある鐘楼は、嘉永６年（1853）に再建された。屋根は、入母屋造檜皮葺で、６本の角柱が二重扇垂木の深い軒をもった屋根を支えている。銅鐘は、寛文７年（1667）に伊藤文兵衛金正が鋳造したもので、高さ180センチメートル、口径116センチメートルあり重要美術品に認定されている。

善光寺鐘楼
（嘉永６年（1853）、登録有形文化財）

（エ）　本坊と院坊

善光寺一山の本坊として天台宗の大勧進と浄土宗の大本願があり、大勧進の下に25院、大本願の下に14坊ある。善光寺の門前は、明治24年（1891）の大火により多くの建物が焼失したが、大勧進、大本願や院坊の中には焼失を免れた歴史的建造物が残り、善光寺と一体となり独特の景観を今に伝えている。

善光寺門前の院坊のまちなみ

a　大勧進

信州大学による善光寺及びその門前にある宿坊や仲見世、寺社等の建造物の調査（『善光寺とその門前』（平成21年（2009））によると大勧進には、寛政年間に建てられた建物として、表大門（寛政元年（1789））、赤門（寛政年間（1789-1801））、行在所（寛政11年（1799））

大勧進

などが残る。なお、大勧進の本堂にあたる萬善堂は、明治35年(1902)建立の木造平屋建、箱棟を載せた入母屋造瓦葺、正面に向拝を設けた建築である。

b　大本願

大本願では、光明閣が明治24年(1891)の大火を被っていない建造物(『善光寺とその門前』(平成21年(2009)))である。これは、歴代天皇の霊を奉っている建物で、木造平屋建、瓦で葺かれている。現在は、特別な法要などの際に使用されている。

大本願

c　世尊院釈迦堂（せそんいんしゃかどう）

世尊院釈迦堂は、明治39年(1906)頃の建築(『善光寺とその門前』(平成21年(2009)))で、木造平屋建、入母屋造瓦葺である。建物に使用される部材に見事な極彩色の彩色が施されている。

世尊院釈迦堂(明治39年(1906)頃)

ウ　活　動

(ア)　善光寺前立本尊（まえだちほんぞん）御開帳

こうした歴史的建造物がひしめく善光寺で、数え年で７年に一度ごと催される御開帳は、仏都でもある本市の最大の祭りで、期間中は、全国から多数の参詣者が集まる。

善光寺は、古くから庶民に開かれた寺として、宗派を問わず全ての人々を受け入れてきたことで知られている。現在、法要をはじめとした寺務は、天台宗と浄土宗の二宗派の僧侶が共同で執り行っている。

善光寺の御開帳は、通常、新緑の季節である４月上旬から５月下旬頃まで約２ヶ月間催される。新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響から１年延期して開催された令和４年(2022)の御開帳は、感染防止対策として参詣者が分散して訪れられるよう期間を長くとり、４月３日から６月29日まで88日間にわたり行われた。

a　回向柱

善光寺の御開帳において回向柱は、次のような意味をもつ。前立本尊は、絶対秘仏である本尊の代わりに参拝者に公開されるものであるが、本堂奥の内々陣に安置されており、そのため、前立本尊から伸びた「善の綱」と呼ばれる綱で繋がれることで回向柱は、前立本尊の命を宿す。御開帳の期間中は、本堂前に建てられた回向柱に触れて前立本尊と御縁を結ぼうとする参拝者の長い列が見られる。

回向柱は、松代藩真田家が現在の善光寺本堂建立の普請奉行に当たった縁から、毎回松代地区から寄進される。令和４年(2022)の御開帳では、松代地区内に適当な用材がなかったため、長野県須坂市豊丘の山中から杉が切り出され、松代地区内の製材工場で化粧が施された。なお、本堂前に建てられる回向柱は、約45センチメートル角で高さが約10メートル、重さ約３トンにもなる。

令和４年(2022)の御開帳では、３月27日に回向柱受入式が行われた。柱は、善光寺本堂前に建立する回向柱と、世尊院釈迦堂前に建てる約６メートルの供養塔の２本である。世尊院釈迦堂前の供養塔も本尊の銅造釈迦涅槃像(重要文化財、鎌倉時代)の右手と結ばれる。

世尊院釈迦堂前の供養塔
(中日庭儀大法要(天台宗)での
世尊院釈迦堂法要の様子)

b　回向柱奉納行列

回向柱奉納行列は、回向柱を松代町内から善光寺まで運ぶ行列である。

行列は、真田十万石の大名行列を先頭にして、回向柱に繋がれた綱を引きながら、松代町内を練り歩いた後、市中心部に移動して善光寺本堂へ向け、中央通りを北上する。回向柱の奉納については、『長野商工会百年史』(平成12年(2000))に昭和30年(1955)から旧松代藩に伝わる十万石行列を加えて回向柱を受け入れるようになったとの記載がある。

通常であれば、奉納行列の経路には、柱に触れようとする人々で溢れかえるが、令和４年(2022)

史跡旧文武学校を出発する「回向柱奉納行列」

の御開帳では、新型コロナウイルス感染対策のため規模を縮小して行われた。

３月27日午前10時に、奉納行列、木遣り隊、そして通常であれば人が曳くところ、トラックに載せられた回向柱が列になって史跡旧文武学校を出発し、30分ほど松代町内を練り歩く。午後に奉納行列は、市中心部に移動して長野商工会議所などでつくる御開帳奉賛会の役員も加わり、大門交差点付近で列を整え、仲見世通り、山門を抜け、善光寺本堂へ向けて進んでゆく。善光寺本堂前の受け入れ式では、回向柱寄進建立会会長から善光寺寺務総長に寄進目録が手渡された。

本堂前に到着した「回向柱奉納行列」

c　回向柱建立式

回向柱建立式は、御開帳が始まる２日前に行われる。善光寺本堂の大香炉前に組み建てられた滑車付きの２本の柱である蝉竿や木製手動ウィンチの神楽桟の伝統的な道具を使い、多くの参詣者に見守られる中、高度な技術をもつ職人たちの手作業により、ゆっくりと回向柱が建ち上がる。回向柱を建ち上げ始めてからおよそ40分後、関係者や参詣者が見守る中、ついに本堂前の回向柱が、天に向かって真っ直ぐに建つ。

回向柱が建ち上がると、善光寺一山の住職による読経で、御開帳の安全無事と成功が願われる。

「回向柱建立式」

d　前立本尊御遷座式

前立本尊御遷座式は、御開帳が始まる前日に行われ、善光寺御宝庫から、御宝輦に乗せられた前立本尊が本堂へと向かう。御宝輦に乗せられた前立本尊は、厳かな雰囲気の中、ゆっくりと参道を進み、数え年で７年ぶりに本堂の内々陣に安置される。

続いて、回向柱開眼法要が行われて多くの参詣者が見守る中、回向柱を包んでいた白い布が取り払われる。

「前立本尊御遷座式」

「回向柱開眼法要」

e　開闢大法要

御開帳の初日は、早朝のお朝事をもって始まる。お朝事は、毎朝本堂で行われるお勤めのことで、はじめに天台宗のお朝事が行われ、続いて浄土宗のお朝事が行われる。お朝事に続き、天台宗、浄土宗の両宗により開闢大法要が営まれる。開闢とは、天地が開け始めて世界が始まることを意味する。

f　中日庭儀大法要

御開帳の期間中は、さまざまな行事が行われるが、その中で最も重要で大規模に行われるものが中日庭儀大法要である。これは、前立本尊を讃える法要で、天台宗と浄土宗により日を変えて回向柱前で行われる。令和４年(2022)は、浄土宗が４月23日、天台宗が５月７日に行った。

この法要における行列は、天台宗と浄土宗で内容が多少異なる。

浄土宗の行列は、大本願を出発した後、三門に向かって参道を直進し、回向柱前で庭儀法要を行う。これまでは、このとき本堂前で稚児による礼讃舞を披露していたが、令和４年(2022)の法要では、新型コロナウイルス感染症対策のため礼讃舞の披露は行われなかった。続いて本堂内で法要を行う。その

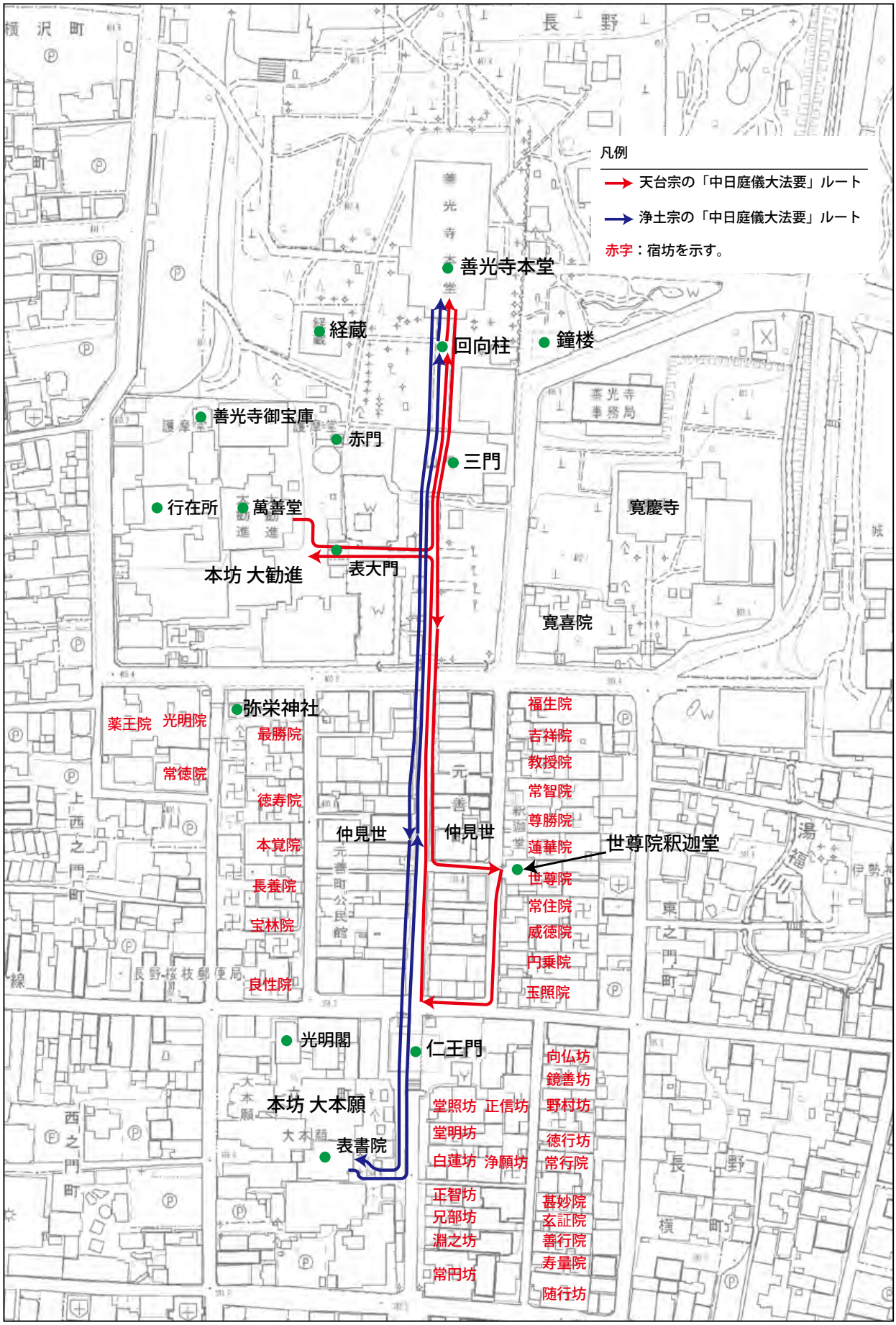
「中日庭儀大法要」（浄土宗）

後、来たときと同じルートをたどって大本願に戻る。

天台宗の行列は、大勧進を出発し三門へと向かう。三門を抜けて回向柱前に着くと、そこで庭儀法要が執り行われる。続いて、本堂内で法要を行い、回廊を廻って散華が撒かれる。その後、参道を長野駅方面に進み仲見世通りの中ほどで左折し、世尊院釈迦堂の前で法要が営まれる。この法要を終えると釈迦堂通りを南下して仁王門の本堂側の前に出て、参道を善光寺方面に向かって大勧進に戻る。

「中日庭儀大法要」（浄土宗）

「中日庭儀大法要」（天台宗）



中日庭儀大法要ルート図（S=1:2,500）

g　結願大法要

「結願大法要」（天台宗）

このようにさまざまな行事が行われてきた御開帳は、結願大法要によって終わりを迎える。結願大法要は、御開帳の最終日に天台宗と浄土宗により本堂でそれぞれ営まれる。

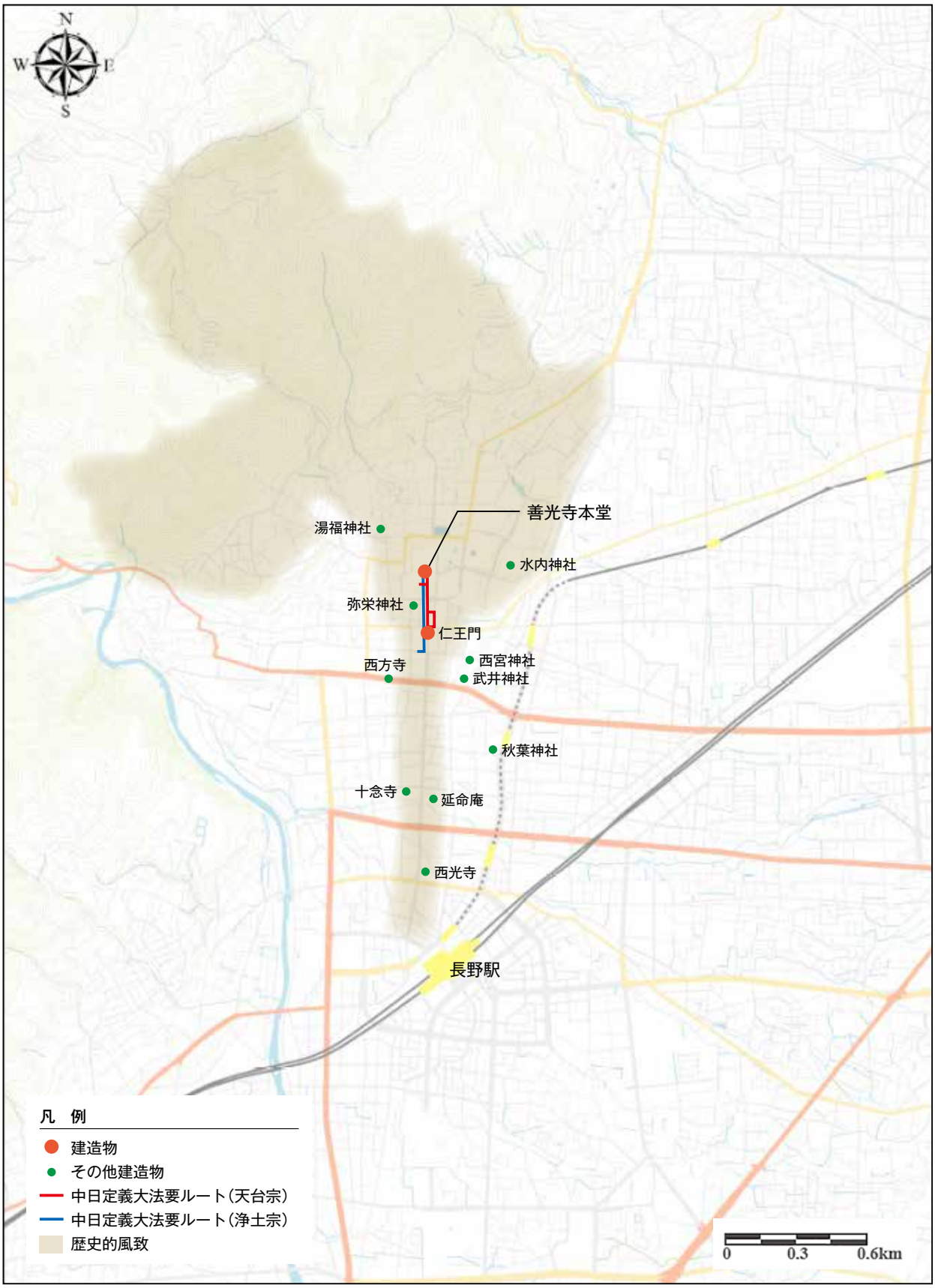
続いて、前立本尊御還座式が行われる。これは、御開帳前の前立本尊御遷座式とは逆に、前立本尊が白装束の男性が担ぐ御宝輦に乗って本堂から御宝庫へと還られるもので、これをもって御開帳が幕を閉じる。

エ　まとめ

古くから宗教や宗派にとらわれずに全ての人々を受け入れてきた善光寺の御開帳は、全国各地から多くの参詣者や観光客を集める。その一連の祭事は、関係者や周辺の人々のみならず、回向柱の拠出にみられるように、同じく歴史遺産が豊富な松代地区にも支えられ、現在まで途絶えることなく続けられている。また、善光寺の御開帳は、経済界にとって一つの周期基準にもなっており、御開帳に合わせて営業戦略、店舗改修計画、商品開発などの予定が組まれることが少なくないといわれる。

緑豊かな山並みを背景に、善光寺及びその周辺の歴史的建造物を中心に執り行われる善光寺前立本尊御開帳は、多くの人々の生活に深く関わる本市の特徴的な歴史的風致となっている。

「前立本尊御還座式」



善光寺御開帳にみる歴史的風致範囲図（S=1/25,000）

COLUMN

【善光寺の伝説】

牛に引かれて善光寺詣(まい)り

むかし、善光寺から東に十里の村里に欲張りで信心薄いおばあさんが住んでました。ある日、川で布をさらしていると、どこからか一頭の牛が現れ、角にその布を引っかけて走って行くではありませんか。あわてたおばあさんは、布を取り戻したい一心で、牛の後を一生懸命追いかけました。走りに走って、おばあさんはついに長野の善光寺までたどりつきました。

ところが牛の姿を見失い、日もとっぷり落ちて途方に暮れ、仕方なく善光寺の本堂で夜を明かすことに。するとその夜、その夢枕に如来様が立ち、不信心をおさとしになったのです。目覚めたおばあさんは、今までの行いを悔いて善光寺如来に手を合わせました。その後、信心深くなり、たびたび善光寺に参詣に訪れるようになったおばあさんは、ついに極楽往生を遂げたといわれています。

一説には、おばあさんが家に戻ってみると、牛が引っかけていったはずの白布が観音様の肩にかかっていたともいわれています。それが、現在の小諸市にある布引観音だといわれています。

このような善光寺にまつわる伝説が残されています。

⑵　善光寺周辺寺社の祭礼にみる歴史的風致

ア　はじめに

善光寺周辺には、善光寺と深い関わりをもつ寺社が多くある。弥栄神社は、京都の八坂神社を御本社とし、善光寺門前に宿坊が建ち並ぶ上西之門通りの一角にある。弥栄神社の社地は、安永３年(1774)に当時の善光寺本坊の大勧進住職によって寄進された。

弥栄神社の御祭礼では、善光寺門前の各町から曳き出された屋台による奉納屋台巡行が行われている。この屋台とは山車のことで、屋台の上で舞を披露するのが弥栄神社の御祭礼の特徴である。

また、美和神社、湯福神社、武井神社、妻科神社、加茂神社、木留神社、柳原神社は、善光寺七社と呼ばれている。このうち善光寺に近い湯福神社、武井神社、妻科神社の三社は、善光寺三社もしくは善光寺三鎮守と呼ばれ、戸隠の創建等が記された『戸隠山顕光寺流記』（県宝、室町時代中期）の「山中之外王子之事」に「井福・武井・妻成(科)御社之山王・善光寺之内白山一之護法也」とあり、特に崇敬されてきたことが分かる。

善光寺周辺の寺社は、弘化４年(1847)の善光寺大地震と明治24年(1891)の大火により甚大な被害を受けたが、復興を遂げ、善光寺周辺に形成された歴史的なまちなみの中で、地域住民により伝統的な祭礼が受け継がれている。

イ　建造物

(ア)　弥栄神社

覆屋に囲われた社殿は、境内の最も北寄りに位置している。覆屋は、木造平屋建、平入、切妻造瓦葺で、向拝柱も含めた外部はすべて漆喰で覆われている。建築年代は、弘化４年(1847)以前であることが判明(『善光寺とその門前』（平成21年(2009)）している。

弥栄神社の覆屋

（イ） 妻科神社

妻科神社は、善光寺の南西、妻科の中央北に位置している。平安時代初期からとみられる諏訪社系の古社とされ、『日本三代実録』（延喜元年(901)）貞観２年(860)の条に妻科地神と記されている。

妻科神社（延宝７年（1679））

本殿は、延宝７年(1679)建立の一間社流造、瓦葺屋根(『善光寺史研究』（平成12年(2000)）である。拝殿は、大正３年(1914)建立(『善光寺史研究』（平成12年(2000)）で、木造平屋建、平入、入母屋造銅板葺屋根、中央に唐破風のついた向拝が設けられている。

（ウ） 武井神社

武井神社は、善光寺の南東、東町に位置している。妻科神社と同様に諏訪社系の古社とされ、主祭神として建御名方命、相殿神として八坂刀売命、彦神別命が祀られている。

武井神社（万延元年（1860））
上段は拝殿、下段は覆屋

本殿と社蔵は、弘化４年(1847)の善光寺大地震で被害を受けた後、13年を要して再建された建物で、万延元年(1860)の建立(『善光寺史研究』（平成12年(2000)））である。本殿は、木造平屋建、平入、切妻造瓦葺屋根で、社蔵は、木造平屋建、平入、切妻造瓦葺屋根であった。現在の拝殿は、平成21年(2009)に平成22年(2010)御柱祭記念事業として建て替えられている。

（エ） 湯福神社

湯福神社は、善光寺の北西、箱清水の入口にあり、戸隠古道に沿った場所に位置している。妻科神社、武井神社と同様に諏訪社系の古社とされ、同社には、主祭神として建御名方命が祀られている。

湯福神社（文久２年（1862））

社名の湯福は、伊吹を起源とし、風に関係のある語といわれ、そのため同社は、風神を祀る神社

として信仰されてきた。境内の北に位置する本殿と拝殿は、文久２年(1862)に建てられた銅板葺屋根の建物(『善光寺史研究』(平成12年(2000)))で、本殿は切妻造、拝殿は入母屋造である。また、敷地北西にある土蔵に弥栄神社仮拝殿の部材が保管されている。

(オ) 健御名方富命彦神別神社(水内大社)

健御名方富命彦神別神社は、善光寺三社と同じ諏訪社系の古社で、善光寺の東、城山公園の一角に位置しており、地域では水内大社と呼ばれている。創建は古く、『日本書紀』(養老４年(720))下巻の持統天皇５年８月の条に、「辛酉に、使者を遣わして、龍田の風塵を信濃の須波(諏訪)水内(長野)等の神を祀らしむ」とあり、後者の水内(長野)が水内大社にあたる。

もともと善光寺本堂北側にあった年神堂(歳神堂)が、神仏分離令によって明治12年(1879)に現在地に遷されて健御名方富命彦神別神社となった。境内に明治17年(1884)に建てられた木造平屋建、平入、瓦葺銅板屋根の拝殿(『善光寺史研究』(平成12年(2000)))がある。このとき旧年神堂本殿は、守田迺神社(長野市高田)に移築されて長野市指定有形文化財になっている。

なお、水内大社のある城山公園は、かつて上杉謙信が陣を張った横山城の跡地でもあり、現在は、長野県立美術館や(仮称)長野こども館などの文化施設が併設された都市公園となっている。

水内大社(明治17年(1884))

(カ) 秋葉神社

秋葉神社は、武井神社の南東、権堂アーケードの入口近くに位置し、祭神として軻遇突智命を祀る。もともと同じ権堂町の往生院境内に小祠を奉祠していたが、弘化４年(1847)の善光寺大地震の難を受けて移転し、さらに明治27年(1894)に現在地へ移転した。敷地内に秋葉神社と刻まれた明治29年(1896)建立の石碑や明治37

秋葉神社(明治30年(1897))

年(1904)建立の縁日記念碑が残っている。本殿は、慶応２年(1866)建立とされる一間社流造で、向拝に唐破風が付き、海老虹梁には竜が巻きついた彫刻が施されている。拝殿は、明治30年(1897)に建てられたとされるもので、間口６間、奥行４間、平入、入母屋造瓦葺屋根である。

(キ) 院　坊

善光寺周辺には、本坊の大勧進(天台宗)の下に25院、大本願(浄土宗)の下に14坊の院坊がある。院坊は、一般に僧や参詣人の宿泊に当てられ、主に本尊が安置されている場、参詣者が宿泊する場、生活の場からなる。参詣者が宿泊する場と生活の場は一体の建造物で庫裡と呼ばれ、参詣者が宿泊する場が床面積の多くを占めている。本尊が安置されている場は、大御堂である善光寺に対して小御堂と呼ばれている。

現在みられる宿坊の多くが木造三階建、中には四階建のものもあるように高密化、多層化しているのは、主に明治時代中頃の鉄道開通によって増えた参詣者を受け入れるためと考えられている。

a　常徳院(門)(登録有形文化財)

常徳院は、善光寺の院坊の一つで、大勧進のすぐ南西、弥栄神社と同じ上西之門通りに立地し、創立年月は不詳であるが、史料から寛文２年(1662)には創立されていたと考えられている。

敷地内には、明治24年(1891)の大火による被災を免れた門が残っており、現存する門は、明治初期にはすでに建てられていたと推測されている。間口一間二尺、切妻造、桟瓦葺の薬医門で、桁は男梁ではなく出三斗が支え、天井が張られていることが特徴的である。

常徳院(門)(明治初期、登録有形文化財)

ウ 活 動

(ア) 弥栄神社の御祭礼

御祭礼は、神の代理として選ばれた純真無垢な十歳前後の御先乗りと呼ばれる少年が、屋台巡行の先頭に立って各町を練り歩くことにより、夏の疫病を祓う祭礼である。

令和５年(2023)の御祭礼は、天王下ろし祭が７月７日に、宵山が７月８日、屋台巡行が７月９日、天王上げ祭が７月14日に行われた。屋台巡行は、権堂町、新田町、元善町が屋台を運行し、西後町と東町は屋台を曳かずに、置き屋台で参加して行われた。

弥栄神社の御祭礼は、『善光寺御祭礼絵巻』(真田宝物館所蔵、文政年間(1818-1830))に、晴れやかな屋台の姿とそれを曳く町人の様子が描かれており、この頃から、かなりの隆盛であったとみられている。

弥栄神社の社地が大勧進住職により寄進されたことから善光寺との関係が深く、弥栄神社の御祭礼は、善光寺の祇園祭とも呼ばれ、江戸時代は原則として大勧進の指揮の下で行われていた。現在も善光寺の僧侶が、天王下ろし祭と天王上げ祭の神事に参列している。

大勧進前を通る屋台
(『善光寺御祭礼絵巻』(真田宝物館蔵、文政年間(1818-1830))

a 仮拝殿の組み立て、撤去

天王下ろし祭が近づくと、弥栄神社の社殿(覆屋)の前に仮設の仮拝殿が組み建てられ、天王下ろし祭と天王上げ祭の神事が、この仮拝殿で行われる。仮拝殿は、昭和22年(1947)から昭和23年(1948)頃の建築で、木造平屋建、妻入、切妻造鉄板葺であり、天王上げ祭が終わると解体、撤去され、その部材は、弥栄神社の北西に位置する湯福神社の境内に保管される。

b　天王下ろし祭

天王下ろし祭の神事は、７月７日に仮拝殿で宮司をはじめ、屋台巡行の御先乗りを務める少年、善光寺関係者、持ち回りの年番町（令和５年(2023)は東之門町）、副年番町役員、妻科地区の役員、商工会議所の会頭、ながの祇園祭の実行委員長などの関係者が参列して行われる。かつて妻科にある聖徳宮で天王下ろし祭が行われていた名残で妻科地区の役員が参列している。

神事は、太鼓の音とともに始まり、まず、神職が祝詞をあげる。次に、祓えが行われ、宮司が神前に進み出て、天王下ろしの祝詞をあげる。宮司は、二拝二拍手一拝の後、玉串を奉献し、続いて、御先乗り、参列者の順で玉串を奉献する。全ての参列者が玉串奉献を終えると、太鼓の音とともに宮司以下の参列者が一拝し、宮司が神前に進み出て一拝した後、「オー」という声とともに神様を迎える。

最後に、仮拝殿に着座する参列者と仮拝殿の前に参列する全ての関係者、参拝者が一拝拍手をして神事が終わる。

天王下ろしの神事の様子

c　屋台巡行

明治維新や太平洋戦争等の一時期を除き、毎年行われていた屋台巡行は、戦後、経済的な理由や人手不足の問題から徐々に実施回数が減っていった。昭和40年(1965)から昭和42年(1967)までの間は松代群発地震の影響により自粛され、昭和43年(1968)に屋台巡行が再開された。そして、昭和45年(1970)５月12日に善光寺忠霊殿落成の協賛として、また、昭和48年(1973)に初めて善光寺御開帳にあわせて巡行が行われたが、以降、天王下ろし祭と天王上げ祭の神事のみが、毎年行われていた。

その後、平成21年(2009)の善光寺御開帳で10台の屋台が巡行して大きな賑わいをみせ、屋台巡行は平成24年(2012)から、ながの祇園祭屋台運行実行委員会が中心となって毎年実施されている。

御祭礼は当初、善光寺門前を中心に行われており、明治４年(1871)の御祭礼加盟町は、東町、岩石町、伊勢町、東之門町、大門町、西町、阿弥陀院町、天神宮町、桜小路、上西之門町、新町、横町の12町で、全て旧善光寺領の町であった。明治21年(1888)に善光寺の南方２キロメートルほどの位置に長野駅が開業して長野駅周辺が都市化してくると、徐々に善光寺から南に位置する長野駅に近い町が参加するようになった。

都市域は、幕末の『小市往還ヨリ善光寺ヲ見図』(嘉永元年(1848)、永井家文書、長野市指定有形文化財)では、善光寺門前と北国街道沿いの比較的限られた範囲に都市域がまとまっているが、次に『信陽善光寺境内及長野市町明細之図』(明治24年(1891))では、善光寺の西側に県庁をはじめとした主要官庁が建ち並ぶ姿が見えるとともに、長野駅の開業により都市域が徐々に南方に拡大していることが分かる。

『小市往還ヨリ善光寺ヲ見図』（嘉永元年（1848）、永井家文書）

『信陽善光寺境内及長野市町明細之図』（明治24年（1891））

d 屋 台

近年、人口減少の進展による担い手不足の問題もあって、旧善光寺領の町に参加を見合わせる町が出てきた。令和５年(2023)時点の屋台巡行加盟町は、上千歳町、上西之門町、北石堂町、権堂町、桜枝町、新田町、末広町、大門町、問御所町、西後町、西之門町、東後町、東鶴賀町、東之門町、東町、緑町、南石堂町、南千歳町、元善町の19町である。この19町のうち15町が、現在も屋台を所有している。さらに、かつて屋台巡行に加盟していた西町上、岩石町も屋台を所有しており、計17町が現在も屋台を所有している。

各町の屋台の多くは、屋台巡行のたびに組み立てられ、巡行を終えると解体して保管されている。組み立てられた状態で保管されている屋台は、西町上、緑町、新田町、西後町、問御所町、東町の屋台である。西町上の屋台は、寛政５年(1793)に制作された本屋台で、建材に欅(けやき)や檜(ひのき)を用い、全面黒漆塗りが施されており、昭和42年(1967)に長野市有形民俗文化財に指定されて長野市立博物館で展示されている。屋台は、その上で舞を披露する踊り屋台が特徴で、中には山崎儀作や和田三郎次といった郷土の匠による華やかな彫刻が施されたものもある。

令和５年(2023)の屋台巡行に参加した町の屋台の特徴は以下のとおり。

権堂町の屋台は、大正２年(1913)に田町の和田三郎次によって造られた踊り屋台で、善光寺周辺の屋台では唯一、上段が踊り屋台、下段が囃子方となる二層構造である。戦後から、屋台の先頭に勢獅子(きおいじし)が立ち、獅子と屋台の一組での巡行が恒例となっている。勢獅子(きおいじし)は、明治４年(1871)に長野県が誕生した際に、その年の天長節に長野県庁の勧めによって獅子頭、幌を下付されて舞ったのが由来とされ、長野市無形民俗文化財に指定されている。

権堂町の屋台と勢獅子(きおいじし)

新田町の屋台は、大正13年(1924)に造られた踊り屋台で、平成６年(1994)に補修された白木造りの屋台である。屋台と一対になるお囃子用の底抜け屋台を平成25年(2013)に復元している。

新田町の屋台

元善町は２台の屋台を保有している。１台は、大正時代制作の踊り屋台とお囃子用の底抜け屋台であり、屋台巡行では、もう

１台の平成13年(2001)に伊勢町から預かり受けた江戸時代末期から明治時代初期にかけての制作で、柱は漆塗り、細部に多数の彫刻が施されている本屋台を使用している。

西後町の屋台は、幕末から明治に活躍した妻科村の山崎儀作によって明治５年(1872)に制作された総欅(けやき)造りの本屋台で、天井、欄間、破風に緻密な彫刻が施されている。

東町の屋台は、明治５年(1872)に山崎儀作によって制作された本屋台で、舞台天井に金箔の松に鷹のほか、破風、入額、欄間に一本彫りの彫刻があり、屋根や柱に黒漆塗りが施されている。

元善町の屋台

西後町の屋台

東町の屋台

そのほか、現存する屋台の種別や制作年などは下表のとおり。

町	屋台種別	制作年	保存形態	制　作
桜枝町	本屋台	明治29年(1895) 10月	解体	山崎儀作
西町上	本屋台	寛政５年(1793)	組立	
西之門町	踊り屋台	明治26年(1893)	解体	
	底抜け	不明	解体	
栄町	本屋台	明治36年(1903) 7月	解体	
元善町	踊り屋台	大正８年(1919)	解体	
	底抜け	不明	解体	
	本屋台	江戸末～明治初期	解体	山崎儀作
東之門町	二階建て	大正末期	解体	

町	屋台種別	制作年	保存形態	制　作
伊勢町	踊り屋台	不明	解体	
	底抜け	不明	解体	
岩石町	踊り屋台	不明	解体	
	底抜け	不明	解体	
東町	本屋台	明治５年(1872)	組立	山崎儀作
大門町上	踊り屋台	大正３年(1914)頃	解体	
	底抜け	不明	解体	
大門町南	本屋台	安政６年(1859)	解体	山崎儀作
東後町	踊り屋台	大正７年(1918)	解体	
問御所町	本屋台	明治５年(1872)	組立	山崎儀作
権堂町	二階建て	大正２年(1913)	解体	和田三郎次
南千歳町	本屋台	昭和５年(1930)	解体	
上千歳町	踊り屋台	昭和初期	解体	
緑町	本屋台	明治初期？	組立	北村喜代松と一門
西後町	本屋台	明治５年(1872)	組立	山崎儀作
新田町	踊り屋台	大正13年(1924)	組立	
	底抜け	不明	組立	
南石堂町	踊り屋台	昭和12年(1937)	解体	
北石堂町	本屋台	昭和11年(1936)	解体	

横沢町には、明治６年(1873)制作の笠鉾が10基あり、長野市立博物館に寄託収蔵されている。網掛けしたものは、平成28年(2016)度の調査により処分が確認されたもの

e　屋台巡行の順路

各町の屋台は、午前９時の巡行開始に向けて、各町の会所を早朝に出発し、各々の順路を取りながら出発地のセントラルスクゥエアに集合する。セントラルスクゥエアは、平成10年(1998)開催の長野冬季オリンピックの表彰式会場として使用された施設を都市公園として再整備した施設である。

御先乗(おさきの)りの一行は、午前８時の鏡開きのあと弥栄(やさか)神社を出発し、仲見世通りを南

下する。善光寺仁王門を通過して真っ直ぐ中央通りを南下し、各町の屋台が待機するセントラルスクゥエアを目指す。

御先乗りの一行と各町の屋台が揃うと、いよいよ屋台巡行が始まる。

午前9時、御先乗りが注連縄を太刀で切り落す注連縄切りが行われると各町の屋台は、各町の役員を従えて馬に乗る御先乗りの一行に先導されて中央通りを進んでいく。

御先乗りの一行は、弥栄神社御祭礼と善光寺祇園祭の幟を先頭に、長刀鉾を表す長印の旗、善光寺大勧進の車柄杓、大本願の月章を持つ白丁、御先乗り、その後ろに屋台巡行加盟町の役員が一列になり、善光寺三門を目指して雅やかの中にも威風堂々と中央通りを北に進んでいく。そして、御先乗りの一行に続いて、権堂町、新田町、元善町の順に屋台が出発する。

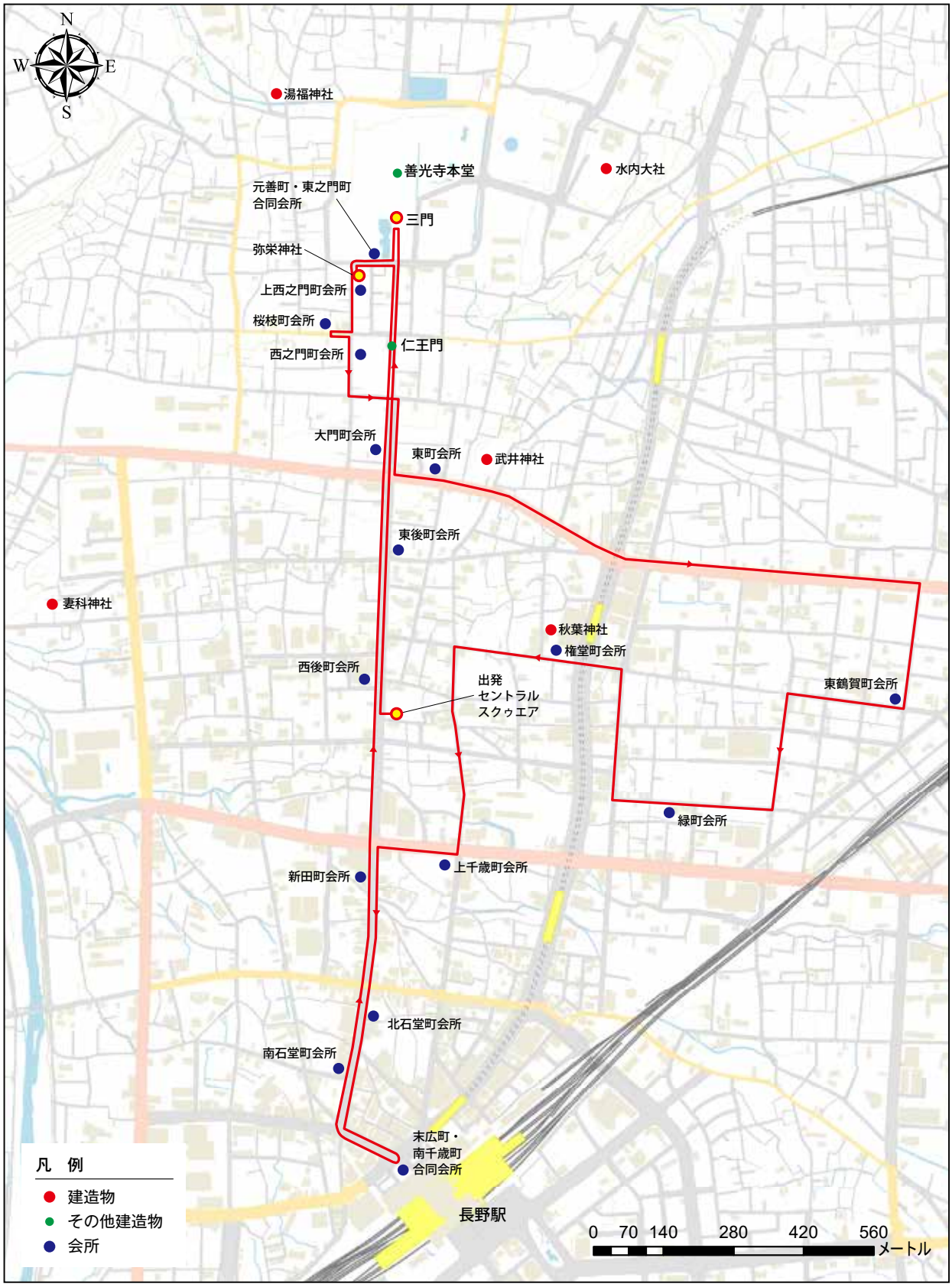
屋台が巡行する中央通りは、かつての北国街道であり、明治時代以降は商業の中心地として栄えてきた通りである。北国街道は、正確には中央通りを登りきったところを横町へ右折し、さらに東へ進み岩石町へとかかる。突き当たりが恵びす講で知られる西宮神社で、そこから道は直角に左折して北方へ延び、戸隠道と交叉して右折し、東へ延びていく。この辺りの北国街道沿いには、歴史的まちなみが多く残る。

屋台が三門に近づくにつれ、徐々に歴史的建造物が増えていき、門前町の雰囲気が増していく。この地域は、大門町南地区と呼ばれ、長野市景観計画において景観計画推進地区に指定されている。善光寺周辺一帯は、景観計画により建築物の高さ制限が設けられているとともに、善光寺を中心とした区域は、風致地区に指定されて良好な景観が保全されている。

中央通りを三門に向かって進んできた各町の屋台は、善光寺境内に入り、門前の景観を特徴づける院坊が建ち並ぶ参道を進んでいく。そして、大本願前を通過して仁王門をくぐると、まちなみが仲見世の店舗に変わっていく。かつて本堂は、現在の仲見世のある場所に建っていたが、宝永4年(1707)に現在地に建てられた。本堂があった場所は堂庭と呼ばれる広場となり、参道に沿って建物が建つ程度の市が開かれていたが、参詣者が多くなる近代以降に、現在のように街区が形成されて常設の店舗が建ち並ぶようになった。

現在、仲見世には、旅館や土産物、仏具などそれぞれの店舗が個性豊かなファサードを構えている。仲見世では、現在も「建物を仁王門より高くしてはいけない」など、善光寺に配慮した建築上の規制が口承されており、個々の店舗が個性的なファサードを構えながらも、まとまりのあるまちなみが形成されている。

仲見世の店舗群を抜けて駒返り橋通りを渡ると、左手に大勧進を見つつ、屋台は



屋台巡行の順路図(S=1:10,000)

三門前に到着する。大勧進貫主と大本願上人の高僧をはじめ威儀を正した院坊の僧侶たちが居並ぶ前で、各町はここで舞を奉納し、答礼を受ける。

その後、御先乗りの一行と各町の屋台は、弥栄神社を南下して大本願の角を曲がり、町なかの悪疫を祓うために参加町の会所を巡行していく。各町の屋台は、大本願の南を通って中央通りに出るまで御先乗りの一行と同じ順路をとり、その後、会所で舞を披露しながら各町の運行順路に従って中心市街地を巡行していく。

f　天王上げ祭

屋台巡行を終えて、天王上げ祭が７月14日に行われる。天王上げ祭の神事は、概ね天王下ろし祭と同様であるものの、天王下ろし祭では、神様を迎えるために社殿の御扉を開いていたものが、天王上げ祭では、神様を送るために御扉が閉められる。この神事をもって弥栄神社の御祭礼が終了する。

(イ)　茅の輪くぐり

茅の輪くぐりは、毎年、妻科神社で６月下旬、湯福神社で６月28日に行われる。茅の輪くぐりは、宮中行事である大祓の一環の神事から起こった行事で、明治時代以降に全国的に行われるようになった。大祓は、犯した罪や穢れを除き去るために、年２回、６月と12月の晦日に行われている。６月の大祓を夏越の祓え、12月の大祓を年越の祓えという。夏越の祓えで行われるのが、茅の輪くぐりであり、茅で編んだ直径２メートルほどの輪をくぐり、厄災を払い無病息災を祈願する。

a　湯福神社の茅の輪くぐり

湯福神社では、昭和13年(1938)頃から茅の輪くぐりが行われるようになった。茅の輪くぐりは、午後１時から３時までの約２時間、善光寺周辺の15町(横沢町、立町、伊勢町、東之門町、西之門町、栄町、上西之門町、狐池町、深田町、桜枝町、箱清水町、花咲町、御幸町、往生地町、元善町)の氏子総代と各区長が中心となって執り行われる。以前は、関係者以外この神事に訪れる人は少なかったものの、現在は、多くの地域住民が訪れている。

大祓の儀式のようす

神事に先立ち、四方に竹を立てて注連縄を張った祭壇が本殿前に設けられ、米、お神酒、野菜、魚、塩、果物

といった供物が供えられる。また、以前は、神事の名称どおり茅を使用していたが、現在は竹で作られた直径２メートルほどの茅の輪が本殿の前に置かれる。

宮司を先頭に氏子総代、区長一列となって、神社入口の手水所で手を洗い清め、祭壇前に整列した後、神事は、宮司が人形を三方に載せて、祭壇で大祓の儀式を行うことから始まる。人形とは、人の形にかたどられた紙のことで、これに自身や家族の名を書き込み、さらに息を吹きかけることによって、半年分の穢れが託されることになる。儀式では、大祓詞が参列者に配られ、参列者も一緒になって祝詞をあげる。

続いて、茅の輪くぐりが行われる。人形が載る三方を掲げた宮司が、境内いっぱいに８の字を描くように、左、右、左と回り、合計３回輪をくぐる。宮司に続いて、氏子総代と各区長、その後に続いて一般参拝者が輪をくぐっていく。

最後に、湯福川にかかる橋の近く置いたかがり火で人形を焚き上げて厄払いをする。かつては、この川に人形を流して厄払いをしていたといわれている。

茅の輪をくぐる

（ウ） 御射山祭

御射山祭は、全国各地にある諏訪神社の総本社である諏訪大社の上社（諏訪市、茅野市）と下社（下諏訪町）で行われてきた伝統的な祭礼で、元々は、御射山という山に茅萱（ススキあるいは尾花）で葺いた臨時の仮屋（穂屋）に、２日から４日ほど参籠して山宮の神霊に対する厳重な祭祀を行うとともに、これに伴う御狩りの行事を行ったものである。

毎年、武井神社では８月26日に、湯福神社では８月27日に御射山祭が行われている。善光寺周辺の諏訪社系の神社だけでなく、全国各地の諏訪社系の神社で御射山祭が行われており、善光寺三社は、いずれも諏訪社系であるが、現在行われているのは、武井神社と湯福神社で、中でも武井神社では盛大に行われている。現在でも御射山祭の日に、ススキの穂で作った神箸で食事をする習慣があり、これはその伝統を踏まえたものである。

a　武井神社の御射山祭

『信濃宝鑑(中巻)』の武井神社を描いた明治33年(1900)の絵図に「御射山祭ト唱フルアリ。毎年八月廿六廿七ノ両日ヲ以テ之レヲ行フ。」とあることから、武井神社では、明治33年(1900)以前から御射山祭が行われていることが分かる。また、『齋藤神主家年中行事録』(弘化５年頃(1848))に、湯福神社の御射山祭に関する記述がみられる。

村社武井神社之景(明治33年(1900))

武井神社では、ススキの穂と箸が頒布される。ススキの穂は、各々の家の神棚等に供えられ、翌朝27日にススキ箸で小豆御飯を食べると、一年中無病息災で過ごすことができるといわれている。また、子供たちの無事育成、家内安全、商売繁盛を祈願する祭礼でもある。

この祭りに重さ約２トンの東町の宮神輿が登場する。神輿は、問屋街として栄えた土地柄も重なり、昭和40年(1965)頃まで毎年、町独自で盛大に担がれてきたが、人口減少や住民の高齢化などで担ぎ手が足りず、その後、30年近く蔵に眠ったままであった。しかし、年々、神輿の復活を願う声が高まり、地域外からの応援もあって平成８年(1996)に神輿が再開された。令和５年(2023)の御射山祭では、多くの担ぎ手が集まって威勢良い掛け声とともに神輿渡御が賑やかに行われ、現在も熱気ある祭りが続けられている。

神輿渡御の様子

(エ) 御柱祭

諏訪大社では、数え年の７年に一度、寅年と申年に御柱祭が行われる。善光寺周辺では、善光寺三社(妻科神社、武井神社、湯福神社)に水内大社を加えた四社が交代して、諏訪大社と同様に寅年と申年に御柱祭を行っている。

最も古い御柱祭の記録は、嘉永７年(1854)３月に妻科神社で初めて御柱祭が行われたことが記されている『嘉永七甲寅年三月十五日於妻科神社御柱祭事行列帳』(嘉永７年(1854))である。その様子が描かれた絵馬が、妻科神社に保存されている。また、武井神社拝殿に掲げられた縦120センチメートル、横350センチメートルの四枚の大絵馬のうち一枚の大絵馬(長野市指定有形文化財)に、万延元年(1860)に行われた武井神社の御柱祭の様子が詳細に描かれている。

御柱祭行列図大絵馬(万延元年(1860)、市指定有形文化財)

史料や絵馬で明治17年(1884)の水内大社から明治35年(1902)の武井神社まで４社で順番に挙行したことが分かることから、少なくとも明治時代以降には、妻科神社、武井神社、水内大社、湯福神社の４社が、数え年で７年に一度ごと交代で御柱祭を行うようになったと考えられている。

その後、御柱祭の挙行が不明な年があるものの、昭和49年(1974)以降は概ね継続されており、近年は、平成16年(2004)に妻科神社、平成22年(2010)に武井神社、平成28年(2016)に湯福神社で行われた。

年　月	神　社	
嘉永７年(1854)　３月	妻科神社	絵馬
万延元年(1860)　４月	湯福神社	絵馬
明治17年(1884)　５月	水内大社	
明治23年(1890)　５月	湯福神社	
明治29年(1896)　５月	妻科神社	絵馬
明治35年(1902)　５月	武井神社	
大正９年(1920)　10月	妻科神社	絵馬
大正15年(1926)　５月	武井神社	絵馬
昭和７年(1932)　４月	水内大社	
昭和49年(1974)　10月	妻科神社	
昭和55年(1980)	―	武井神社の遷宮祭
昭和61年(1986)　６月	武井神社	絵馬
平成４年(1992)　10月	湯福神社	
平成10年(1998)　９月	水内大社	絵馬
平成16年(2004)　10月	妻科神社	
平成22年(2010)　９月	武井神社	
平成28年(2016)　10月	湯福神社	
令和４年(2022)　９月	水内大社	絵馬

史料や記録が残る４社の御柱祭

令和４年(2022)の御柱祭は、９月10日に水内大社で行われた。御柱は、壱之柱と弐之柱の２本で、直径が約40センチメートル、長さが約10メートルで、それぞれセントラルスクゥエアから曳行された。

a 御柱の曳行

御柱の行列は、セントラルスクゥエアを午後１時30分に出発し、大祭旗、木遣り、神職を乗せた馬、氏子らが連なり、盛大に御柱を曳行する。

先に壱之柱が、東之門町、新町、岩石町、淀ヶ橋、三輪田町、元善町、箱清水、東町、横山、本郷、相ノ木西、相ノ木東、逸目、上宇木、下宇木の主に国道406号の北側の町の氏子により曳行される。続いて、弐之柱が、上千歳町、田町、東後町、東鶴賀町、緑町、居町、西鶴賀町、問御所町、南千歳町、権堂町、南県町、鶴賀七瀬町、七瀬の国道406号の南側の町の氏子により曳行される。

御柱の行列は、セントラルスクゥエアを出ると中央通りを北上し、善光寺仁王門をくぐり、仲見世通りを進んでいく。そして、石畳舗装や電線電柱類地中化などが進んだ駒返り橋通り、御幸坂通りを経て水内大社に到着する。

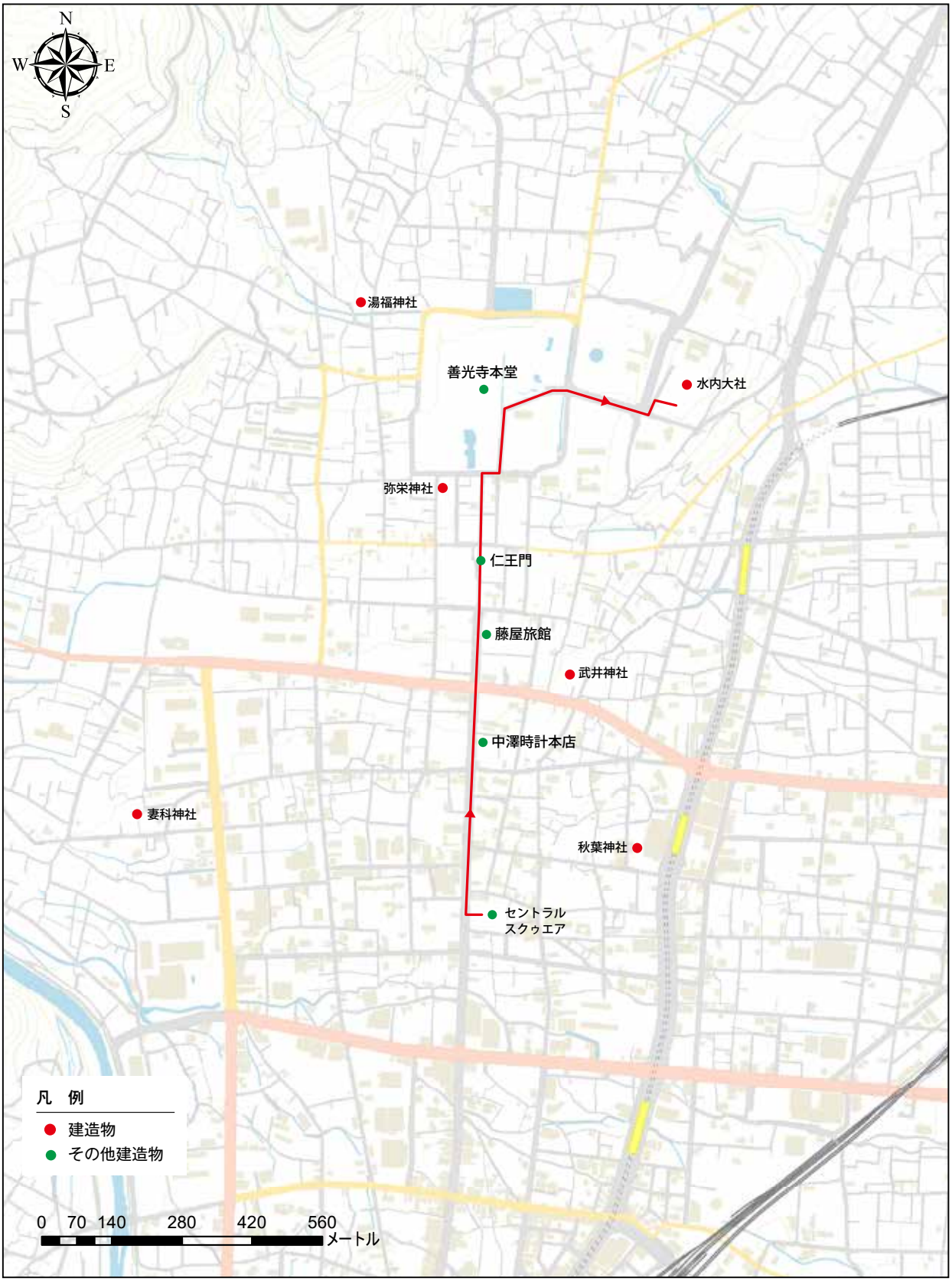
御柱が水内大社に到着して冠落としの後に御柱の頂部に薙鎌が打たれると、いよいよ建御柱が行われる。薙鎌は、龍の落とし子の形をした薄い鉄製の板のことで、風をなごめる呪宝とされる。そして、大勢の人々が見守る中、御柱は、壱之柱、弐之柱の順に、ゆっくりと拝殿の前に建てられる。御柱が建つと大きな歓声と拍手上がり、その後、神楽の奉納、拝殿内で神事が行われて一連の祭事が終了する。

セントラルスクゥエアを出発する

中央通りを進む御柱の行列

御柱に薙鎌が打たれる

大勢の人々が見守る中、御柱が建つ



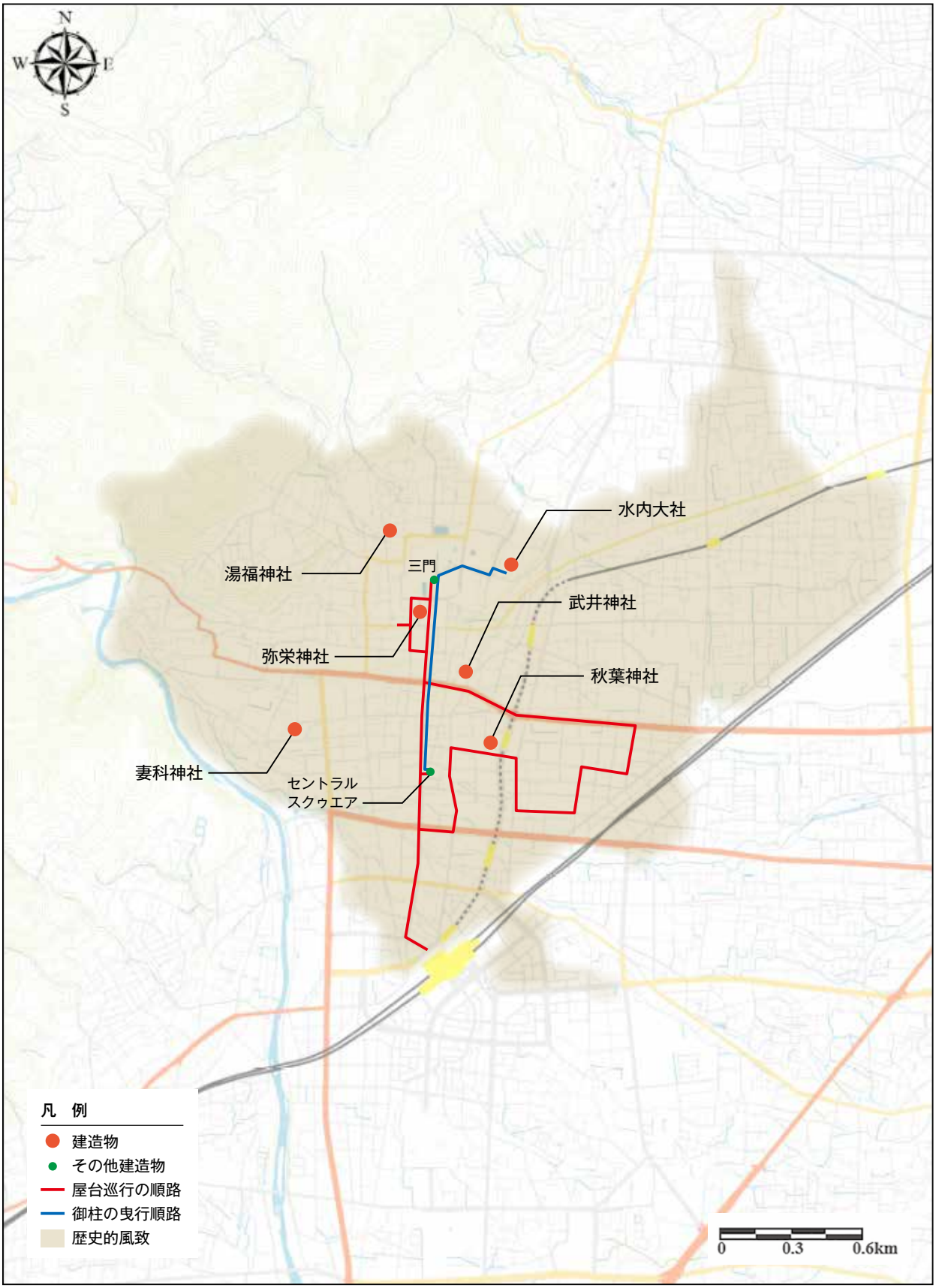
御柱の曳航順路（S=1:10,000）

エ　まとめ

善光寺門前には、高密化、多層化した宿坊建築の歴史的まちなみが広がり、また、善光寺三社をはじめ、長い歴史をもつ寺社が点在している。善光寺周辺の寺社で行われる祭礼は、善光寺門前に成り立った各町の往時の隆盛がしのばれ、休止の時期があるものの、地域住民によって今に受け継がれている。

また、水内（みのち）大社には、市内の専門学校の学生が作成した平成10年(1998)挙行の御柱祭（おんばしらさい）の絵馬が掲げられており、現在、同じようにして令和４年(2022)の御柱祭（おんばしらさい）の絵馬が作成されたほか、屋台巡行でも毎年のように大学生が担い手として参加している。

このように、幅広い世代に支えられ、歴史ある寺社で行われる祭礼に、まちなみと一体となった良好な歴史的風致を見ることができる。



善光寺周辺の祭礼にみる歴史的風致範囲図（S=1/25,000）

⑶　戸隠信仰にみる歴史的風致

ア　はじめに

高妻山(標高2,353メートル)、乙妻山(標高2,318メートル)、戸隠山(標高1,904メートル)、西岳(標高2,053メートル)などからなる戸隠連峰は、300万年ほど前に海底から隆起した山々で、凝灰角礫岩を主とする山体は三十三窟に代表される大小の岩窟や、天岩戸を連想させる断崖絶壁をつくりだし、平安時代から山岳修験の一大霊場として知られている。

また、北国街道は、中山道の追分宿(長野県軽井沢町)から越後高田(新潟県上越市)方面に抜ける街道で、佐渡金山の道や参勤交代の道として知られている。北国街道沿いにある全国的に著名な善光寺から山岳信仰で名高い戸隠へ通じる道が延びており、北国街道は、善光寺や戸隠へ参詣するための道でもあった。善光寺から戸隠へ通じる道は、脇街道でないものの、２つの拠点を結ぶ信仰の道として多くの参詣者の往来があった。岩鼻通明氏の『近世の旅日記にみる善光寺・戸隠参詣』(長野郷土史研究会『長野』165号(平成４年(1992))によれば、天保11年(1840)までの統計で善光寺参詣者の約４分の１が戸隠を参詣したとみられている。

このように、善光寺と戸隠は、近世以降、多くの参詣者が訪れる信仰の地であり、双方を結ぶ道は、信仰の道として重要な役割を担っていた。

「戸隠山善光寺詣」の題簽

イ　建造物

(ア)　戸隠神社

江戸時代以前の戸隠は、本院(奥院)、中院、宝光院からなる天台宗寺院、戸隠山顕光寺を中心として、古くから農業神として庶民信仰を集めていた九頭龍権現などが一体化し、多くの修験僧が修行に訪れる神仏混淆の聖地として栄えていた。『戸隠山顕光寺流記』(県宝、室町時代中期)によれば、本院(奥院)大講堂の創建は、承徳２年(1098)と伝わる。

その後、明治維新の神仏分離令により、慶長以来続いてきた天台宗の僧は、還俗して神社に奉仕する神職となり、戸隠山顕光寺は、奥社、中社、宝光社、九頭龍社、火之御子社の五社からなる現在の戸隠神社となった。

奥社本殿(昭和54年(1979))

奥社、中社、宝光社は、山岳信仰の歴史を今に伝え戸隠修験の旧態がよく保存されていることから、戦国時代末期に戸隠衆徒が一時避難していた筏ヶ峰三院跡(長野県小川村)とともに昭和54年(1979)に戸隠神社信仰遺跡として県史跡に指定されている。

なお、戸隠神社奥社本殿は、度重なる雪崩によって幾度となく倒壊しており、現在の本殿は、昭和54年(1979)に鉄筋コンクリート造で再建されている。

a　中社本殿

昭和17年(1942)の火災後、昭和31年(1956)に再建(『戸隠－伝統的建造物群保存対策調査報告書』(平成28年(2016)))されたもので、木造平屋建、妻入、入母屋造銅板葺屋根で正面に唐破風を設けた向拝が付く。

祭神は天八意思兼命で、学業成就、家内安全、営業隆昌、開運守護に御利益があるとされる。

中社本殿(昭和31年(1956))

b　宝光社本殿

擬宝珠から文久元年(1861)の建築であることが判明している。木造平屋建、桁行7間、梁間正面3間、背面5間、妻入、入母屋造銅板葺屋根、全体が白木造で、正面に唐破風付の向拝を付ける。向拝、欄間、小壁などに施された彫刻は、鬼無里の屋台などを制作した彫工北村喜代松の手によるものである。

宝光社本殿(文久元年(1861))

天表春命を祭神とし、学問や技芸、裁縫、安産や婦女子の神として御利益があるといわれる。

c　九頭龍社

奥社本殿に向かい左側の一段下がった場所にある。祭神は、戸隠の地主神の九頭龍大神で、江戸時代以前から水を司る九頭龍権現として篤い信仰がある。現在の社殿は、昭和11年(1936)の雪崩による崩壊後、昭和12年(1937)に建て替えられた(『戸隠－伝統的建造物群保存対策調査報告書』(平成28年(2016)))もので、正面に拝殿が建ち、拝殿の背後からＬ字形にのびる回廊が岩屋ノ間へと続いている。拝殿は、木造平屋建、間口３間、奥行３間、妻入、入母屋造鉄板葺屋根で、正面に一間の向拝を付ける。

九頭龍社(昭和12年(1937))

d　火之御子社

中社の集落の入口にあり、社名は、祭神の天鈿女命(栲幡千々姫命)のまたの名を火之戸幡姫と称したことに由来する。奥社、中社、宝光社の三社は、江戸時代まで、それぞれ奥院、中院、宝光院の三院であったが、この社殿のみ、神仏混淆の時代にあっても純然たる神社であった。舞楽芸能の神、火防の神として信仰が篤い。

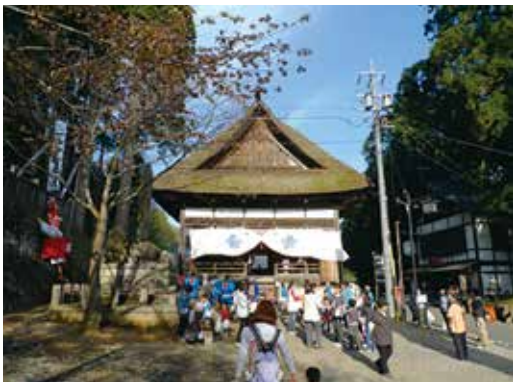
火之御子社(明治17年(1884))

現在の社殿は、棟札写から明治17年(1884)の建築で、木造平屋建、間口３間、奥行４間、正面が入母屋造、背面が切妻造、鉄板葺屋根である。

e　五斎神社拝殿

中社区の神社で、拝殿の北側の石壇を登って本社があり、その東に宣澄社がある。

このうち拝殿は、木造平屋建、間口２間半、妻入、入母屋造茅葺屋根の建物で、棟札から元治元年(1864)の建築であることがわかっている。


五斎神社拝殿(元治元年(1864))

（イ） 宿　坊

中社門前には、南北に延びる大門通り沿いに神仏混淆の時代から続く宿坊が建ち並んでいる。多くの宿坊は、明治時代以降に建てられたものであるが、中には江戸時代中期に遡るものもある。建物は、豪雪地に特有の太い部材を用いて、茅葺の大屋根を持つどっしりとした構えを特徴としている。屋根形式は、寄棟造が多いが、中には入母屋造のものもある。。

また、宝光社門前の宿坊は、昭和20年(1945)の大火により大門通りから東側に位置する建物の多くが焼失した。宝光社境内の近くには、この大火をのがれた宿坊がいくつか残り、中には江戸時代中期に遡るものもある。

中社のまちなみ

宝光社のまちなみ

a　旧徳善院本堂(極意家神殿)及び旧徳善院庫裏(極意家宿坊)（登録有形文化財）

中社境内に最も近い位置にあり、文化８年(1811)に焼失したが、翌年の文化12年(1815)頃に再建された。旧徳善院本堂(極意家神殿)は、木造平屋建、間口６間、奥行５間、平入、寄棟造茅葺、前面に唐破風を有した向拝が付く。旧庫裏(宿坊)は、神殿と直角に配置され、木造二階建、間口11間、奥行７間半、入母屋造茅葺屋根の建物である。

旧徳善院本堂及び旧徳善院庫裏
（文化12年(1815)、登録有形文化財）

b　横倉旅館

中社境内の前を東西に延びる横大門通りに位置し、主屋が明治３年(1870)頃に建てられた(『戸隠－伝統的建造物群保存対策調査報告書』(平成28年(2016)))宿坊である。木造総二階建、平入、寄棟造で、間口が12間に及ぶ大規模な茅葺の建造物である。

c　宿坊神原（かんばら）

江戸時代まで奥社にあった宿坊の一つで、中社大門通り沿いに位置し、明治33年(1900)頃に現在地に建てられた茅葺の木造二階建、寄棟造の建造物(『戸隠－伝統的建造物群保存対策調査報告書』(平成28年(2016)))である。

宿坊神原(明治時代中期)

d　久山（ひさやま）館

中社境内の西側に位置し、江戸時代は戸隠山顕光寺（とがくしさんけんこうじ）の本坊勧修院として一山を統括する別当職にあり、戸隠神領一千石のうち五百石を領していた。昭和17年(1942)の火災により、敷地内にあった客殿や庫裏等の建築物は焼失した。現在の旧館は昭和31年(1956)の建築(『戸隠－伝統的建造物群保存対策調査報告書』(平成28年(2016)))で、また現在も残る回遊式の庭園や守護不入之碑のほか、敷地南側に東西約120メートルにわたって築かれた石垣は、城郭を思わせる壮大な景観を有しており、近世の戸隠を代表する工作物として貴重な遺構である。

e　越志（おし）家住宅主屋(旧廣善院客殿)(登録有形文化財)

宝光社門前にある昭和20年(1945)の大火をのがれた宿坊の一つで、寛政６年(1794)に建築された。現在宿坊として利用されている建物は、内部に神殿を設け、木造、間口12間、奥行６間、平入、寄棟造茅葺屋根で、一部に中二階がある。江戸時代まで客殿、庫裏として利用されており、客殿と庫裏の双方の機能を併せもった形式の代表的な建築である。

越志（おし）家住宅主屋(寛政６年(1794)
登録有形文化財)

f　武井旅館

宝光社門前にあり、棟札から旧客殿部分が延享２年(1745)に建てられたことが判明している。木造平屋建、平入、寄棟造茅葺の建物である。

武井旅館(延享２年(1745))

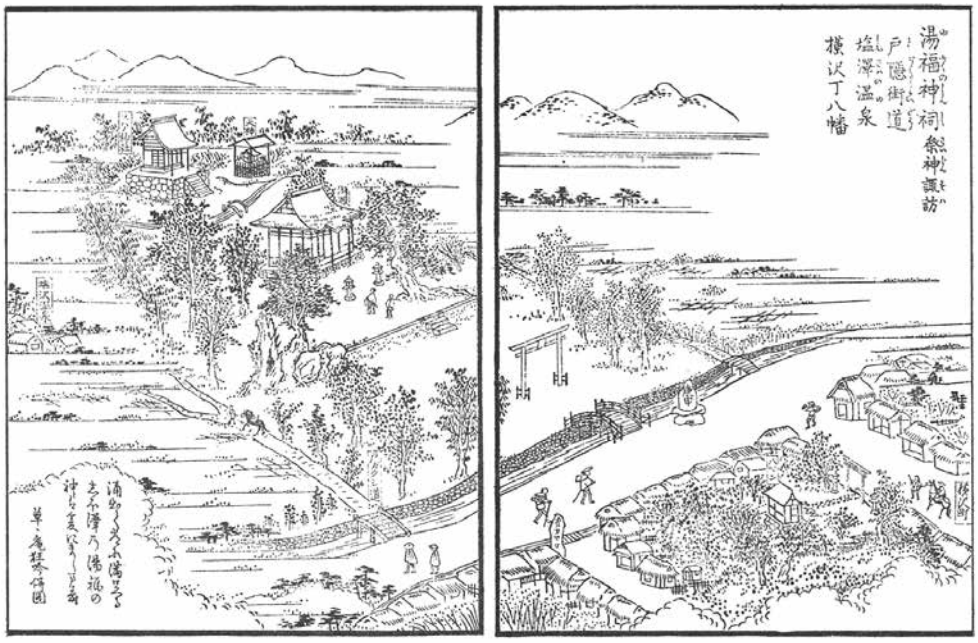
（ウ） 戸隠古道

善光寺から戸隠へ参詣する信仰の道は、主に三本であった。

第一は、湯福神社の脇を通り、しぐれ坂、七曲りを経由し、飯縄山の裾野を越えて戸隠へと至る道。第二は、善光寺仁王門から西へ進み、上ヶ屋を経由して大久保の茶屋付近で第一の道と合流する道。第三は、新諏訪から入山、上野を経由して戸隠へ至る道である。このうち、多くの参詣者が善光寺と戸隠の双方を参詣する表参道として第一の道を通った。

そのほかにも戸隠へは、鬼無里の中心地の町から小川沿いを北上して宝光社の大門通りに合流する道、北国街道柏原宿を起点とする裏参道、松代方面から小市、坪山、折橋を経由して戸隠へ至る道など、幾筋もの道が延びていた。

江戸時代後期の国学者、紀行家であった菅江真澄（宝暦４年(1754) ～文政12年(1829)）は、天明４年(1784)に善光寺と戸隠を訪れ、このときの体験が『菅江真澄遊覧記』（重要文化財、江戸時代）に記されている。また、文政元年(1818)に善光寺と戸隠を参詣した江戸時代後期の戯作者十返舎一九は、このときの体験を『戸隠善光寺往来』（文政５年(1822)）として出版している。さらに、豊田利忠執筆の『善光寺道名所図会』（嘉永２年(1849)刊行）に、善光寺から戸隠に至る街道が挿絵付きで記され、当時の街道の様子をうかがうことができる。

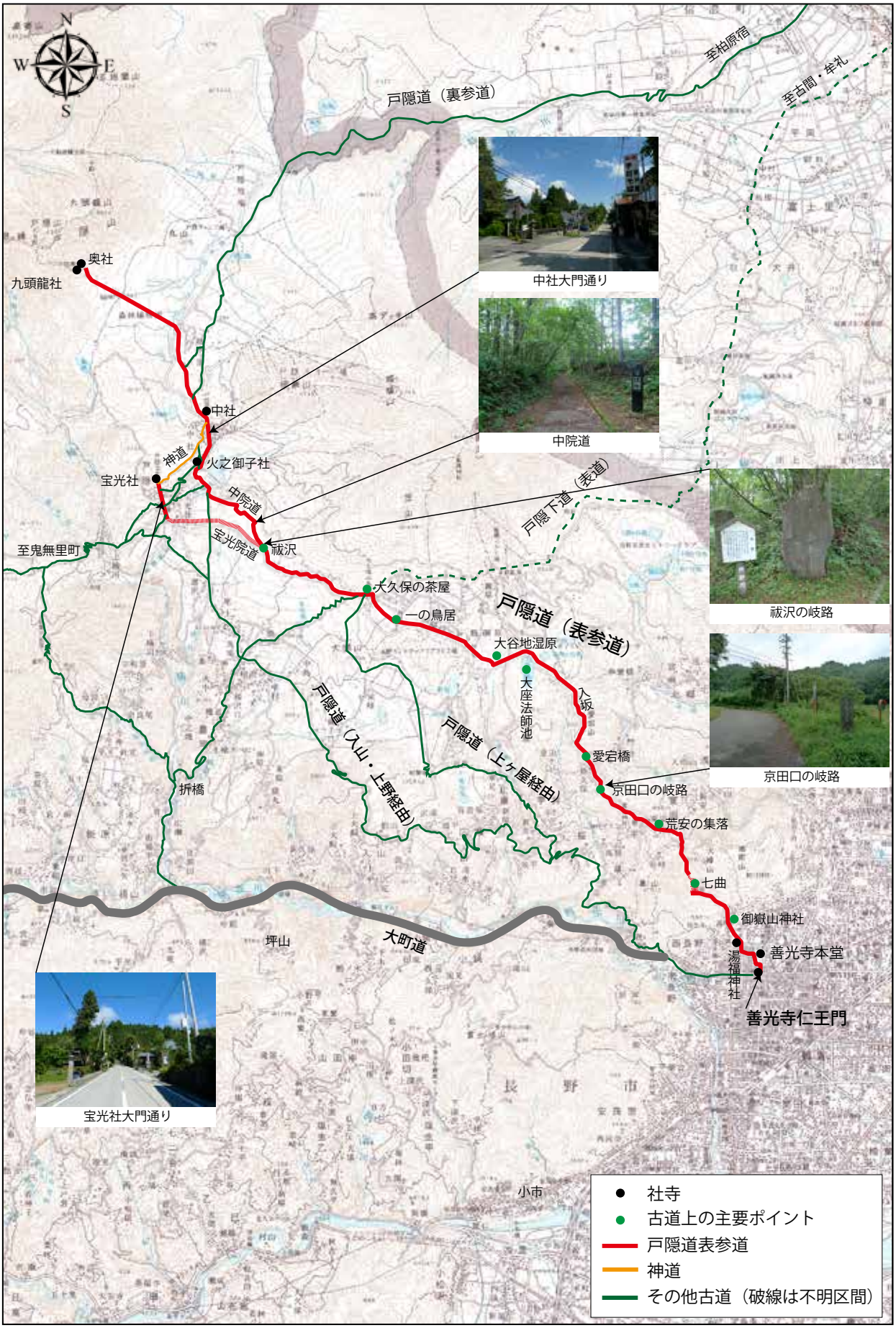


『善光寺道名所図会』（嘉永２年(1849)刊行）に見える湯福神社

戸隠道表参道は、善光寺を出発点として、善光寺三社の一つである湯福神社、そして御嶽山神社の脇を通り、人家のない山中に入っていく。なお、湯福神社は、『善光寺道名所図会』（嘉永２年(1849)刊行）に戸隠街道の文言とともに境内の様子が描かれている。

善光寺から28町（約３キロメートル）のところに、古道が唯一通過する荒安の集落がある。現在は、ひっそりとした農村集落であるが、かつては茶屋が営まれ、戸隠古道の数少ない休息地として往来する人々で賑わっていた。荒安の集落の中心に集落の北に位置する飯縄山を信仰対象とする飯縄神社の里宮がある。この里宮は、飯縄信仰を全国的に広めた千日太夫の冬期居所として、武田信玄が創建したといわれている。

昭和39年(1964)に増加する自動車交通に対応するため、市街地と戸隠を結ぶ戸隠バードラインが開通した。戸隠バードラインは、古道を拡幅したところもあるが、古道と別に道路を設けたところも多く、戸隠バードラインに沿って江戸時代以前から続く古道の趣が多く残されている。特に、大谷地湿原から戸隠側の道筋は、舗装の施されていない歩行者専用の古道として、今も当時の趣が保たれている。



戸隠道（表参道）（S=1:100,000）

a　町石（丁石）（長野市指定史跡）

古道には、参詣者が道に迷うことのないように江戸時代以前から分岐ごとに戸隠への道筋を示す道標がいくつも建てられている。善光寺と戸隠を結ぶ古道のほぼ中間地点に飯縄と戸隠の境を示す一の鳥居の峰があり、ここから戸隠方面に１町（約109メートル）ごとに町石が建てられ、古道の道筋を詳細にうかがうことができる。宝光社までの道のりは43町あり、同じく一の鳥居から中社まで53町、中社から奥社まで30町ある。一の鳥居から戸隠神社奥社までの間の町石は、長野市指定史跡になっている。

古道に残る町石

町石は、戸隠参詣が最も盛んになっていた江戸時代後期のものとされ、それぞれの参道ごとに建てられていたが、中には道路改修などにより失われたものもある。平成に入り、戸隠古道整備の一環として町石の調査が行われ、一の鳥居から宝光社の間の町石が整備された。

一の鳥居の地名は、江戸時代以来、戸隠神領に入る最初の鳥居がこの場所にあったことに由来する。明治19年（1886）に建立された鳥居は、老朽化により倒壊の危険が生じたため、昭和60年（1985）に取り壊されており、現在も当時の礎石が残っている。また、礎石の脇に弘化４年（1847）の善光寺大地震で倒壊するまで建っていた石造の鳥居の一部が今も残っている。現在、この周辺一帯は、一の鳥居苑地として利用されており、妙高戸隠連山国立公園に指定されている。

『善光寺道名所図会』
（嘉永２年（1849）刊行）にみえる一の鳥居

明治19年（1886）建立の一の鳥居

b　茶　屋

一の鳥居を過ぎて古道を７町ほど進むと、大久保の地に入る。ここは、善光寺から七曲りを経由して延びる戸隠表参道と現在の信濃町の古間や飯綱町の牟礼方面からの戸隠下道、鬼無里方面からの古道が交わり、古くから多くの人々が行き交う交通の要地として賑わいをみせていた。

茶屋は、江戸時代、幕府の直轄地であった戸隠に毎年のように検地に訪れる幕府の役人の休息地、また、幕府と戸隠との連絡役に当たった松代藩の武家人の寄り合い所として、戸隠の玄関口となる大久保の地に建てられたのが始まりとされている。

大久保には、昔から２軒の茶屋があり、一軒は、寛永元年(1624)創業とされる旧釜鳴屋(かまなりや)(現在の大久保西の茶屋)で、もう一軒は、釜鳴屋の東隣に構える文化２年(1805)創業とされる旧大久保東の茶屋(現在の大久保の茶屋)である。旧大久保東の茶屋は、創業当時の建物が一度火災によって焼失した後、明治時代に木造平屋建、平入、寄棟造茅葺で再建されたとされるものである。敷地に文化13年(1816)と刻まれた帝釋天尊像供養塔が残っている。

ウ　活　動

(ア)　戸隠神社の祭礼

奥社、中社、宝光社を中心に、年間をとおして数々の行事が行われている。現在行われている年中行事は、明治維新後に戸隠神社となってから整えられたものであるが、その行事の端々に江戸時代以前から続けられてきた神仏混淆時代の内容を垣間(かいま)みることができる。

主な年中行事に、４月から10月にかけて毎月行われる月並祭、５月の祈年祭、11月の新嘗祭(にいなめさい)がある。

■ 戸隠神社年中行事一覧

日時		行事名	太々神楽献奏
１月			
１日	午前４時	歳旦祭(奥社)	
２日	午前10時	歳旦祭、講社祭(中社)	あり
３日	午前10時	歳旦祭、講社祭(宝光社)	あり
７日	午前11時	鎮火祭(奥社)	
２月			
節分前日	午前11時	古札焚上祭(中社)	
節分の日	午後３時	追儺祭(中社)	
11日	午前10時	紀元祭(中社)	

日時		行事名	太々神楽献奏
4月			
25日	午前6時30分	月並祭(中社)	あり
28日	午前6時30分	月並祭(宝光社)	あり
29日	午前10時	昭和祭(中社)	
5月			
1日	午前6時30分	月並祭(中社)	あり
3日	午前6時30分	月並祭(宝光社)	あり
5日	午前6時30分	月並祭(宝光社)	あり
6日	午前6時30分	月並祭(中社)	あり
8日	午前6時30分	月並祭(中社)	あり
14日	午前10時	祈年祭(中社)	あり
15日	午前11時	祈年祭(奥社)	あり
16日	午前6時30分	月並祭(宝光社)	あり
16日	午後3時	祈年祭(宝光社)	あり
18日	午前11時	祈年祭(火之御子社)	あり
20日	午前6時30分	月並祭(宝光社)	あり
6月			
1日	午前6時30分	月並祭(中社)	あり
6日	午前10時	飯縄社祭(飯縄社)	
15日	午前6時30分	月並祭(宝光社)	あり
中の巳の日	午前10時	種池祭(種池ほか)	
30日	午後3時	大祓式(奥社、中社、宝光社)	
7月			
1日	午前6時30分	月並祭(中社)	あり
15日	午前6時30分	月並祭(宝光社)	あり
8月			
1日	午前6時30分	月並祭(中社)	あり
14日	午前10時	例祭(中社)	あり
15日	午前11時	例祭(奥社)	あり
16日	午前6時30分	月並祭(宝光社)	あり
16日	午後3時	例祭(宝光社)	あり
18日	午前11時	例祭(火之御子社)	あり
9月			
1日	午前6時30分	月並祭(中社)	あり
2日	午前11時	末社祭(宝光社)	
10日	午前10時	末社祭(中社)	
15日	午前6時30分	月並祭(宝光社)	あり
10月			
1日	午前6時30分	月並祭(中社)	あり

日時		行事名	太々神楽献奏
11月			
3日	午前10時	明治祭(中社)	
22日	午前10時	新嘗祭(中社)	あり
23日	午前11時	新嘗祭(奥社)	あり
24日	午後2時	新嘗祭(宝光社)	あり
25日	午前11時	新嘗祭(火之御子社)	あり
12月			
23日	午前10時	天長祭(中社)	
30日	午後3時	大祓式、除夜祭(中社、宝光社)	
31日	午後4時	大祓式(奥社)	
31日	午後6時	除夜祭(奥社)	
31日	午後11時	越年神事(奥社)	

a　太々神楽(長野県指定民俗文化財(無形民俗文化財))

太々神楽は、『永代太々神楽講設立呼びかけ文書』が作成された天明2年(1782)以前から行われており、明治時代の神仏分離令により神楽献奏が一時禁じられたが、明治12年(1879)に禁止措置が解除されて以降、現在まで途絶えることなく伝承されている。

現在、太々神楽は、戸隠神社楽部の神職により伝承されており、年中行事に併せて年間100回ほど奉納されている。現在行われている舞は、10座(降神の舞、水継の舞、身滌の舞、巫子の舞、御返幣の舞、吉備楽の舞、三剣の舞、弓矢の舞、岩戸開きの舞、直会の舞)あり、そのうち5座の舞が江戸時代の舞に相当する。

この神楽は、北信地域に分布する岩戸神楽系統のおおもとに位置付けられるものであり、県内の太々神楽の系統や系譜、変遷を研究する上で重要な役割を担う神楽である。

太々神楽の舞一覧

舞の内容	舞の様子
1　降神の舞 八百万の神々を祭りの場に招き奉る舞。翁面を着けた一人の舞人が、前段は左右の手に狩衣の露紐を取り、後段は神霊の依り代となる幣とそれを祓い清める榊の枝を持ち、四方八方に向かって神々の招来を乞い願う。御神入の舞ともいう。	
2　水継の舞 男女二神による舞で、順調な降雨と五穀豊穣を祈る舞。翁面狩衣姿の水久万里神が大麻と鈴を持って四方の罪穢を祓い、女面千早緋袴姿の水波乃売神が長い柄杓と扇で四方の水瓶に天水を注ぐ。後段は水波乃売神が下がり、水久万里神が順調な河川の流れと作物の成長を祈る。	
3　身滌の舞 祓戸四柱の神による祓い清めの舞。神前に供えた大釜で沸騰する湯を笹の葉でふりかけ、自分自身と座を清める。湯立て神楽の遺風を伝えている。笹の舞ともいう。	
4　巫子の舞 清純な少女が、手にした神鈴を振り神前を清々しく祓い清める。緋の袴と白の舞衣を身につけ、宝冠をいただいた巫子の舞う姿は、あたかも春の野に蝶が戯れるようである。	
5　御返幣の舞 神力を表象する四武神が四方八方の邪神を平定する舞。古くは「反閇の舞」とも称され、独特の足捌きで足踏みをしながら、前段は矛により、後段は太刀を抜いて邪神をなぎ払う。 ※反閇：道教の歩行呪術が根源。	

舞の内容	舞の様子
6　吉備楽の舞 狩衣をつけた２人又は４人の巫子が「位の山」という今様歌と雅楽風な唱歌と笛の音に合わせ国家安泰を祈願する舞。	
7　三剣の舞 ３人の武人が始め笹と鈴で、後に剣を抜き、邪をなぎ払う舞。前段、３人の舞人が鈴と笹を振りながら反閇の足捌きで邪を踏み破り、祓(はら)い清める。中段は３人が剣を抜き、後段で１人が両手に剣を頂いて四方八方の邪神をなぎ払う。修験道の精神をよく表している豪快勇壮な舞。	
8　弓矢の舞 ２人の武人が弓矢で遠くにうごめく邪を射止める舞。赤、黒の襖(おう)に石帯をつけ、頭に「おいかけ」をつけた巻纓(けんえい)の冠を被る随身装束で、静かな楽奏に合わせ優美典雅に、ときに激しく舞う。随身の舞ともいう。	
9　岩戸開きの舞 天岩戸開き神事にちなんだ戸隠神社に縁の深い舞。赤の袍(ほう)をつけた布刀玉命が岩戸の前に大榊を供え、黒の袍をつけた天児屋命が天照大御神にお出ましいただけるよう祝詞(のりと)を唱える。続いて天鈿女命が岩戸の前で楽しげに舞い、次第に神掛かっていく。舞が最高潮に達すると岩陰から天手力雄命が現れ岩戸を引き開け、岩戸の左右に侍していた布刀玉命・天児屋命が祝いの言葉を申し上げる。	
10　直会の舞 天照大御神が岩戸からお出ましになり、世の中が再び光に包まれた喜びを表す舞。夜明けを告げる長鳴鶏を表象した巫子が鈴と扇を持って舞い遊ぶ。直会とは祭りなどの特殊な時間から平常の時間へと戻ることをいう。この舞をもって戸隠神社太々神楽は、お開きとなる。	

b　式年大祭

戸隠神社の祭礼のうち、最も華やかなものが数え年で７年に一度行われる式年大祭である。式年大祭は、毎回、４月下旬から５月中旬にかけて行われており、令和３年(2021)の大祭は、４月25日から５月25日までの31日間に及んだ。

この大祭は、かつて、宝光社祭神(天表春命)と中社祭神(天八意思兼命)が、ともに奥社(天手力男命)社殿に奉祀されていたことから、数え年で７年に一度の式年に、宝光社と中社の祭神が渡御によって本宮の奥社に還られるものである。奥社の地は中社や宝光社に比べて積雪量が多いことから、現在、奥社への渡御は奉告祭をもって代えられており、宝光社から中社までの間で渡御が行われている。

式年大祭は、戸隠神社社務所に残る当時の社務全般を記した『日記』(明治33年(1900))に、通常の年中行事とは別に１月16日から臨時祭の文言がみられ、同年５月９日に宝光社祭典、５月10日に奥社祭典、さらに５月11日の中社の祭典をもって臨時祭が終了とあり、最も古い事例をたどることができる。また、信濃毎日新聞の大正13年(1924)４月14日の記事に「戸隠神社の大祭　四月廿八日より五月二十日まで」とあり、併せて寶物展覧(式年大祭に併せて実施される仏具等を展示する宝物展)が行われたことも記されている。

式年大祭は、神社の形態に整えられた明治時代以降に周期的に行われるようになった祭礼であるが、戸隠山顕光寺として繁栄していた江戸時代以前は、御開帳という形で祭礼が行われていた。天明４年(1784) 12月から天明５年(1785)５月までのことが記された『戸隠山顕光寺国元御開帳諸事留帳』によれば、善光寺で行われているような御開帳が、天明５年(1785)３月10日から４月20日にかけて行われたことが記されており、４月９日に「奥院権現様御遷座」とある。式年大祭は、明治時代になり戸隠神社として形を変えながらも、江戸時代以前に行われていた御開帳を起源とする祭礼と見なすことができる。

（a） 執行奉告祭

式年大祭は、４月25日の執行奉告祭をもって始まる。奥社、中社、宝光社の各社殿において、祓(はら)いや祝詞(のりと)、玉串奉献といった神事がしめやかに執り行われる。また、同日に着山式が宝光社社殿で行われる。これは、明治政府の神仏分離令によって、やむなく戸隠を離れることになった本尊を式年大祭に合わせて戸隠神社に迎えるもので、戸隠神社宮司と各寺の住職が、それぞれ祝詞(のりと)やお経をあげる珍しい式典を見ることができる。

大祭期間中は、旧奥院の本尊仏の聖観音や旧中院本尊仏の釈迦如来を宝光社社殿で拝観することができる。また、ほぼ毎日、中社、宝光社で特別祈祷祭が行われるほか、中社で太々神楽(だいだいかぐら)の献奏がある。大祭が行われる時期は、月並祭や祈年祭といった年中行事が多く行われる時期でもあり、期間中であっても滞りなく年中行事が行われる。

そして、大祭が最も華やかに彩られるのが、宝光社から中社までご神体を送る行列が進む渡御(とぎょ)の儀と中社から宝光社に戻る還御(かんぎょ)の儀である。

中社社殿での執行奉告祭

（b） 渡御(とぎょ)の儀

渡御(とぎょ)の儀は、５月９日に行われる。

これまでは、渡御(とぎょ)に先立ち、宝光社社殿で獅子神楽(かぐら)が奉納されてきたが、令和３年(2021)の式年大祭は、新型コロナウイルス感染症のため、規模を縮小して開催された。獅子神楽(かぐら)は、伎楽、舞楽などとともに大陸から移入されたもので、中世においては、全国各地で祭礼が演じられた。戸隠の獅子舞の起源は、少なくとも慶長17年(1612)に幕府から千石の朱印状を賜った頃に土地の農民の悪魔祓いや収穫感謝の祭りで舞が行われたことに遡ることができるとされている。

祭神が御鳳輦に移される

宝光社社殿前で、続いて社殿内で神事が行われ、神事が終わると、いよいよ渡御に向けて、祭神が御扉の奥から御鳳輦へと移される。宮司に奉持された祭神は、四方を絹垣で囲われた中を警ひつの声に導かれながら、御扉から社殿内に敷かれた布単の上をゆっくり進み、御鳳輦の中へ奉遷される。祭神を乗せた御鳳輦は、白装束に身を包んだ神職に担がれながら、中社を目指して宝光社を出発する。このとき担がれる御鳳輦は、今回の式年大祭に合わせて新調したもので、重さが約250キログラムある。なお、宝光社の境内には、平成３年(1991)に制作された神輿と、檜材で路盤153センチメートル角、屋根上の如意宝珠、水煙、鳥居上部の瓔珞、四隅に吊るされた鈴に真鍮に金メッキが施されている文化元年(1804)に制作された重さ約160貫(約600キログラム)の神輿が展示してある。

宝光社社殿を出発した行列は、宝光社の鳥居をくぐり、宝光社大門通りを、茅葺や茅葺を鉄板で覆う大屋根を持つ宿坊のまちなみを通り、四つ角まで南下した後、中社に向かって北上する。

行列は、神職、御鳳輦などが連なり、厳かな中にも壮麗さを漂わせながら、道の両側に紙垂を付けた縄が渡される中社社殿までの約３キロメートルの道のりを

中社のまちなみの中を進む

中社の鳥居前を進む

進んでいく。令和３年(2021)の行列は、宝光社を出発した後、２キロメートルほど御鳳輦をトラックに載せて進んだ。

中社の集落に近づき、再び茅葺の大屋根をもった宿坊のまちなみが見えてくると、中社境内まで真っ直ぐに延びる中社大門通りの視界が開けてくる。行列は、白装束の神職が御鳳輦を担いで、令和２年(2020)に建て替えられた大鳥居が見える通りを再び中社社殿に向けて歩み出す。通りに立つ住民や観光客は、御鳳輦が前を通過すると頭を垂れ、御鳳輦を見送る。

中社社殿前に到着すると、祭神が御鳳輦から中社社殿内の御扉内に移されて、ついに宝光社の祭神と中社の祭神が数え年で７年ぶりの御対面を果たす。

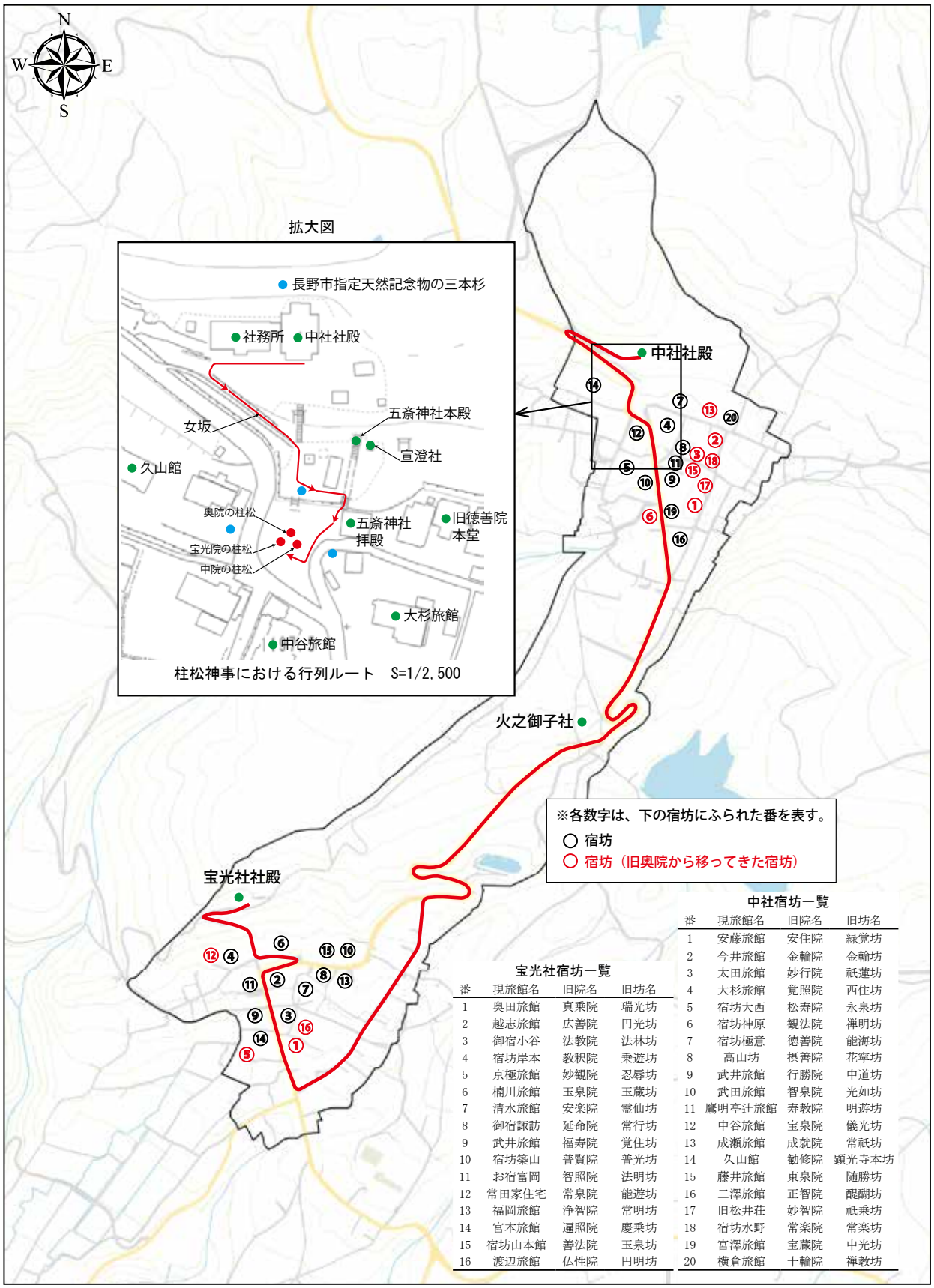
（c） 宣澄踊り（長野市指定無形文化財）

式年大祭の期間の中盤で宣澄踊りが行われる。宣澄踊りは、戸隠修験道の本山大先達であった東光坊宣澄が応仁２年(1468)に当山派の恨みをかって暗殺されたことをしのんで毎年８月16日に行われており、式年大祭の期間中も行われる。

宣澄踊り

踊りは、通常、五斎神社境内に祀られている宣澄大明神の社殿前で行われるが、式年大祭に併せて行われる踊りは、手拭を頭にまいた男性が中社社殿内に集まって踊りを行う。

宣澄踊りは、踏む、蹴るの動作が中心の素朴な踊りで、前唄７つ、中唄５つ、後唄３つからなり、七五三踊りともいわれている。また、修験道に深く関連した踊りとされ、北信濃一帯に伝えられている烏踊、盆じゃもの、蹴りこみ踊、田の草踊などは、この宣澄踊りが起源と考えられている。現在は、保存会が組織されて受け継がれている。



宝光社宿坊一覧

番	現旅館名	旧院名	旧坊名
1	奥田旅館	真乗院	瑞光坊
2	越志旅館	広善院	円光坊
3	御宿小谷	法教院	法林坊
4	宿坊岸本	教釈院	乗遊坊
5	京極旅館	妙観院	忍辱坊
6	楠川旅館	玉泉院	玉蔵坊
7	清水旅館	安楽院	霊仙坊
8	御宿諏訪	延命院	常行坊
9	武井旅館	福寿院	覚住坊
10	宿坊築山	普賢院	普光坊
11	お宿富岡	智照院	法明坊
12	常田家住宅	常泉院	能遊坊
13	福岡旅館	浄智院	常明坊
14	宮本旅館	遍照院	慶乗坊
15	宿坊山本館	善法院	玉泉坊
16	渡辺旅館	仏性院	円明坊

中社宿坊一覧

番	現旅館名	旧院名	旧坊名
1	安藤旅館	安住院	緑覚坊
2	今井旅館	金輪院	金輪坊
3	太田旅館	妙行院	祇蓮坊
4	大杉旅館	覚照院	西住坊
5	宿坊大西	松寿院	永泉坊
6	宿坊神原	観法院	禅明坊
7	宿坊極意	徳善院	能海坊
8	高山坊	摂善院	花寧坊
9	武井旅館	行勝院	中道坊
10	武田旅館	智泉院	光如坊
11	鷹明亭辻旅館	寿教院	明遊坊
12	中谷旅館	宝泉院	儀光坊
13	成瀬旅館	成就院	常祇坊
14	久山館	勧修院	顕光寺本坊
15	藤井旅館	東泉院	随勝坊
16	二澤旅館	正智院	醍醐坊
17	旧松井荘	妙智院	祇乗坊
18	宿坊水野	常楽院	常楽坊
19	宮澤旅館	宝蔵院	中光坊
20	横倉旅館	十輪院	禅教坊

御鳳輦渡御の順路図（S=1:10,000）

（d） 還御の儀

還御の儀は、渡御の儀から２週間後の５月23日に行われる。中社社殿を出発した御鳳輦は、沿道で住民や観光客が見送る中、渡御の儀と同様な行列で宝光社社殿まで進んでいく。大勢の人々が待つ社殿に到着すると、祭神は、四方を絹垣で囲われた中、御鳳輦から御扉の奥へ移される。

５月25日に式年大祭を締めくくる奉告祭は、奥社、中社、宝光社の各社殿で行われる。また、同日、宝光社社殿で離山祭が行われる。これは、着山式で宝光社社殿に迎えた戸隠山顕光寺時代の旧本尊を各寺院に還す祭礼である。

中社から宝光社に向けて進む

御鳳輦が宝光社に戻る

c　柱松神事

柱松神事は、かつて年中行事の中でも重要な意味を持った戸隠神社の火祭りで、柱松を焼き、その燃え具合をみて農作物の豊凶を占うものであった。

柱松神事の歴史は古く、『戸隠山顕光寺流記』（県宝、戸隠神社所蔵、室町時代中期）によれば、永仁７年(1299)に、行人と老僧の間に柱松神事に関する法式をめぐって争いがあったことが記されている。また、江戸時代の『千曲之真砂』（宝暦３年(1753)）附録「水内郡戸隠山三社祭礼之事」の条に、「水内郡戸隠山三社御祭り、格別異なる神事故ここに記す也」とあり、神事の概略が記されている。そのほか、江戸時代に戸隠一山が上野寛永寺へ提出した『戸隠山三所権現祭礼次第』（江戸時代）や松代藩の絵師によって描かれた『戸隠祭礼図巻』（真田宝物館蔵、江戸時代末期）に神事の様子が詳細に描かれている。

かつては毎年７月の７日に中院、10日に宝光院、15日に奥院で行われ、明治維新以降途絶えていた柱松神事が、これらの資料に基づき平成15年(2003)の式年大祭に併せて復活した。柱松神事は、特別祈祷祭、行列、柱松山伏の入峰修行、験比べ、火祭り、直会の５つの組み立てで平成15年(2003)以降３年ごとに行われ、中社大鳥居前の広庭で戸隠にある根曲がり竹や木を使って組み建てられたられた旧三院の柱松に火をつけ、燃え具合で世情を占うという火祭りである。

『戸隠祭礼図巻』（真田宝物館蔵、江戸時代末期）

令和３年(2021)の柱松神事は、７月11日に行われた。まず、中社社殿内で戸隠一山のすべての聚長(しゅうちょう)が奉仕して柱松特別祈祷祭が執り行われる。中社社務所前に斎主、祭員、聚長(しゅうちょう)らが一列に並び、中社社殿横で祭事が行われた後、中社社殿内へ移動して祭事が行われる。

柱松特別祈祷祭が終わると、特別祈祷祭に奉仕参列した一行は、召し立て役の指示で中社社殿前庭に整列し、お祓(はら)いを受ける。杖払を先頭として修験者、各種幟持ち、神職、聚長(しゅうちょう)、大先達などが、中社社殿前から社務所前まで一列に並ぶ。

中社社殿前を出発した行列は、社務所前を通り、女坂を下り、市の天然記念物に指定されている三本杉の一つを右手に見ながら五斎神社本殿前へ進む。さらに、五斎神社の石段を降りて、中社大鳥居をくぐり、柱松が用意された大鳥居前の広庭に到着する。広庭には、大鳥居に向かって、左から宝光院、奥院、中院の柱松が立つ。三つの柱松が立つ理由は、江戸時代以前の神事が、奥院、中院、宝光院でそれぞれ行われていたためである。

柱松は、三院が所在する生活環境に応じて異なる材料で四角錐状に組み建てられる。中院の柱松は、幣竹と呼ばれる根曲がり竹を用い、先端に天下泰平の幟を立てる。宝光院の柱松は、細めの雑木を用いて、先端に営業隆昌の幟を立てる。奥院の柱松は、中院の根曲がり竹と宝光院の雑木を混ぜ合わせて組み立て、五穀豊熟の幟を立てる。なお、『善光寺道名所図会』（嘉永２年(1849)）に、江戸時代に柱松神事が行われていた石川県の白山、戸隠(奥院)、飯

柱松
「善光寺道名所図会」

縄における柱松の形が描かれている。現在戸隠神社で行われている柱松神事は、奥院の形を採用している。

行列が大鳥居前の広庭に揃うと、降神の儀が行われる。次に、修験者が柱松を祓い、大大麻(通常よりも大きい大麻)所役が一般参加者を祓う。続いて、大先達が錫杖を振り、所役、聚長、修験者が般若心経を奉唱する。その後、大先達の注連縄切りが行われると、柱松に火がつけられる。修験者や神事参加者が、祓いや般若心経を唱えながら柱松の周囲を巡り、神事特別祈願串のお焚き上げ(護摩供養)が行われる。その後、中社社殿に戻り、最後に直会として、太々神楽の巫子の舞が舞われ、昇神の儀によって一連の神事が終わる。

柱松に火がつけられる

経を唱えながら柱松の周囲を巡る

(イ) 戸隠古道の維持

飯縄山の自然豊かな中を通る戸隠古道の大谷地湿原から戸隠までの区間は、土の道が残り、道沿いに江戸時代の丁石や歴史的建造物が残る。この道は、地域住民を主体として下草刈り等の日常の維持管理が続けられており、シラカバやカラマツなどの木々の中をバードウォッチングやトレッキングを兼ねた参拝者や観光客が訪れている。

古道の維持管理には、古くから戸隠神社の聚長が関わりを持っている。聚長は、神職として戸隠神社に奉仕するとともに、全国から集まる信者への祈祷や宿泊の世話を行い、その多くが中社または宝光社の門前で宿坊を営んでいる。宿坊は、戸隠神社となる以前の戸隠山顕光寺の頃からの歴史があり、大きな茅葺屋根をもつ歴史的建造物が多く、中には江戸時代に建てられた建造物もある。

このように聚長は、宿坊として旅館業を営む面も合わせもち、中社と宝光社において中社旅館組合、宝光社宿坊組合を組織し、戸隠神社の歴史や地域の伝統文化を伝える活動を行っている。

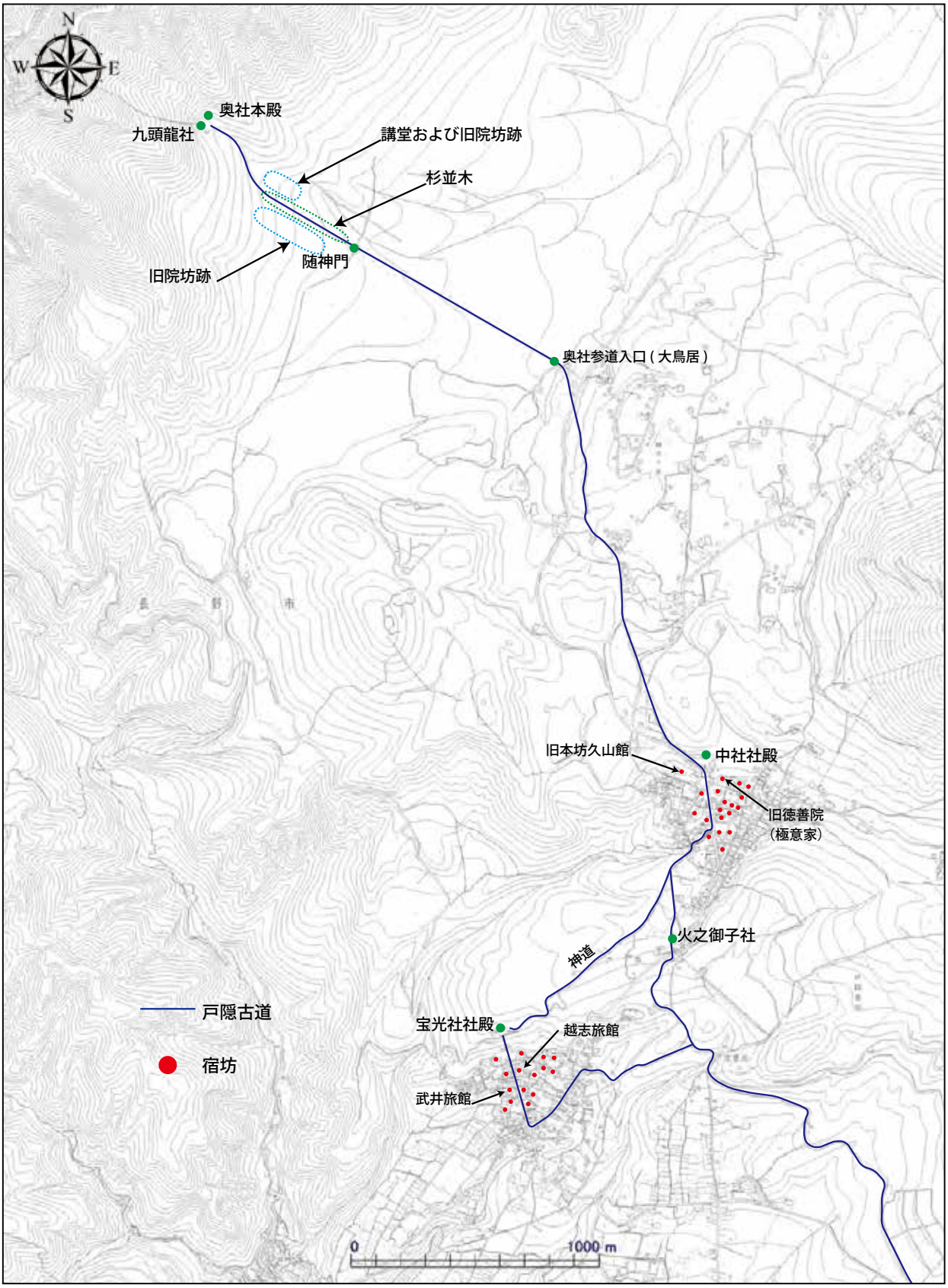
その活動の一つに、戸隠古道の維持管理があり、中社旅館組合、宝光社宿坊組合に加え、越水旅館組合(越水は、中社の北に位置する地域)等が中心となり、下草刈り等

の古道整備や町石の点検などを行っている。

戸隠古道の維持管理作業では、歩行者が高原の澄んだ空気や涼しげな景色、そして、長い時間を刻んだ戸隠古道の歴史を歩いて感じてもらえるように丁寧に整備をしており、初夏を迎える頃になると、組合員が、刈り払い機や厚手の大きな鎌を持って笹や草を刈り払うほか、案内看板を清掃する様子が見られる。

昭和８年(1933)に戸隠観光協会が設立された際の記録に旅館組合により古道整備活動が行われていたことが記されている。古道は、江戸時代以前から存在しており、また、宿坊関係者が古道の整備に継続して携わっていることから、活動の歴史はかなり古いと考えられている。

維持管理作業の様子



戸隠古道の図（S=1:20,000）

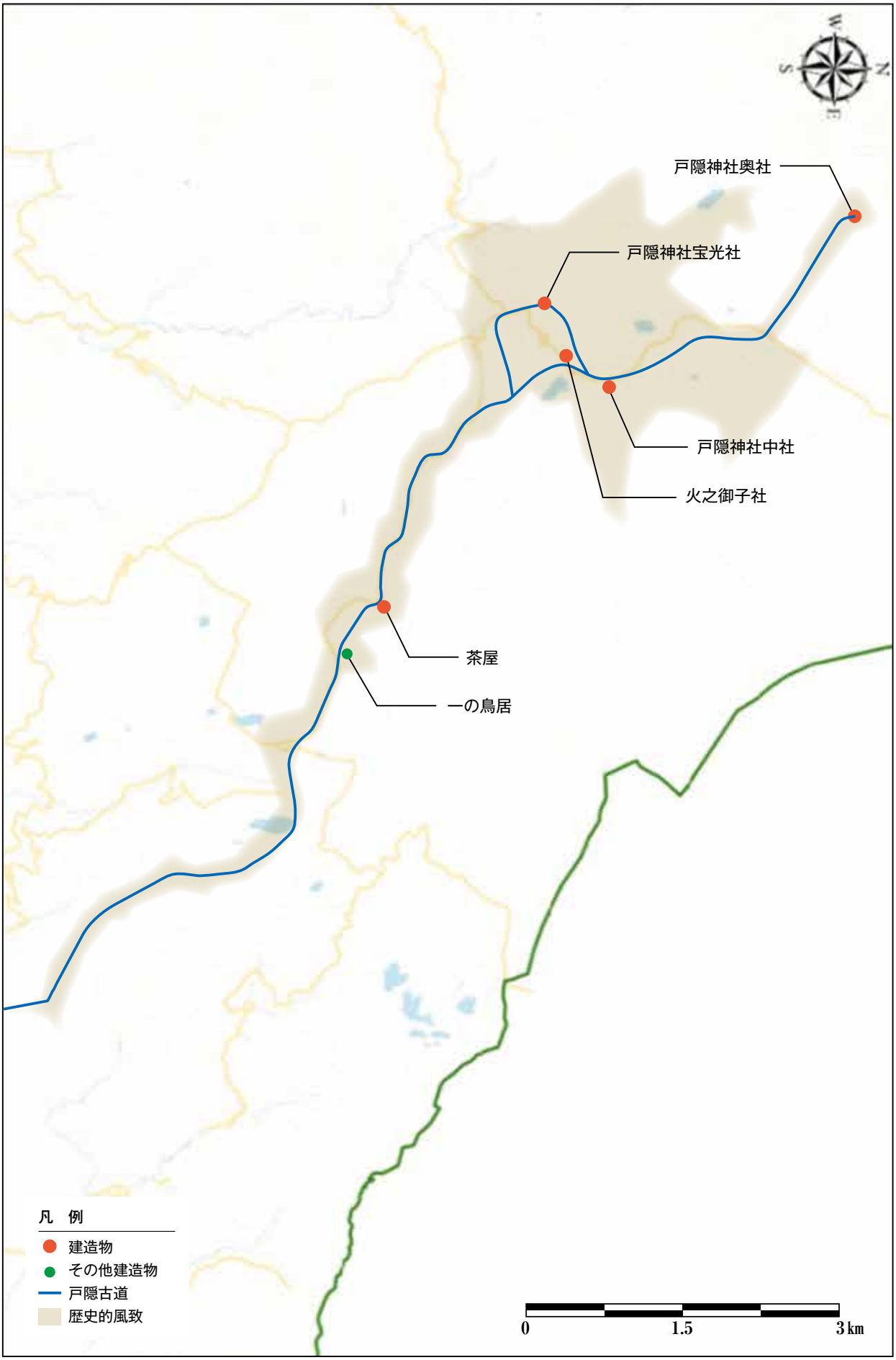
エ　まとめ

標高1,000メートルを超える場所にあり、周りを戸隠連峰と飯縄山に囲まれて冬季は深い雪に覆われる厳しい自然環境にある戸隠は、古くから修験の地として知られてきた。

戸隠神社の式年大祭は、明治維新後の神仏分離や廃仏毀釈（きしゃく）により戸隠山顕光寺（とがくしさんけんこうじ）から戸隠神社への移行後に行われるようになった祭礼であるが、江戸時代まで奥院、中院、宝光院と呼ばれていた伝統を受け継ぎ、豪雪地らしいどっしりとした造りの伝統的建造物の残るまちなみの中で、神仏混淆時代の伝統的な営みを随所に見ることができる。

また、古くから信仰の道として多くの往来のあった戸隠古道は、往時の町石と道筋が残り、戸隠神社の神職でもある聚長（しゅうちょう）を中心とした地域住民により維持されて、自動車の通る道路が整備された今でも、高原の自然を楽しみながら、かつて参詣した人々と同じように、ゆっくりと歩いて戸隠神社を参拝する来訪者に使われている。

このように戸隠神社で行われる祭礼に戸隠神社の神職を中心に維持、継承され、宿坊や古道が作り出すまちなみと一体となった良好な歴史的風致をみることができる。



戸隠信仰にみる歴史的風致範囲図（S=1/60,000）

⑷　戸隠の伝統的な生業（なりわい）にみる歴史的風致

ア　はじめに

標高が1,000メートルを超える戸隠は、気温、水温が低いために稲作に適さず、十分なコメを収穫することが難しかったためにコメの代用としてソバの実が古くから食されたとされている。江戸中期には、祭礼の際のハレの料理として蕎麦（そば）切りが出され、また、戸隠へ訪れた貴人や参拝者をもてなす際にも宿坊や庄屋などで振る舞われていた。

戸隠の蕎麦（そば）切りは、中社、宝光社地区の宿坊など寺方で出された精進料理として供えられたもので、近代以降に「戸隠そば」として広く一般に提供されるようになった。今なお伝統的なそば打ちの技法や「ボッチ盛り」と呼ばれる盛り付け方、また、戸隠竹細工で編まれた笊（ざる）に盛られるという特徴が受け継がれている。

中社地区では、江戸時代にコメの代わりに山中に自生する根曲がり竹（チシマザサ）を切り出して年貢として納めることが特別に許され、切り出された根曲がり竹を材料とした竹細工が作られるようになった。

戸隠竹細工は、原材料の切り出しから加工、仕上げまでを一貫して一人の職人が手作業で行うという特有のもので、その技術はもちろんのこと、根曲がり竹の保護活動として山中でタケノコ狩りを監視する筍番（たけのこばん）や、竹を切り出す際の仕来りなどが、親から子へ途絶えることなく受け継がれてきている。重要伝統的建造物群保存地区に選定された中社地区を中心に、現在も30人ほどの職人によって時代の暮らしに合った竹細工が作り続けられている。

また、山間地である戸隠では、古くから山麓に自生した茅（ヤマガヤ、ススキ）が屋根材として利用されてきた。明治期に越後の技術を伝承した職人が、戸隠で茅葺を生業（なりわい）としてきたが、高度経済成長期以降になると茅葺建物の減少により、その継承が危ぶまれていた。しかし、中社、宝光社地区の住民によって伝統的建造物群の保存活動が活発になったことで、伝統的な茅葺の技術が若い職人に受け継がれている。また、歴史ある景観を守ろうと、一度は途絶えてしまった住民相互の茅刈りを地域住民が主体となって再開し、歴史的なまちなみを守り、伝える活動が行われている。

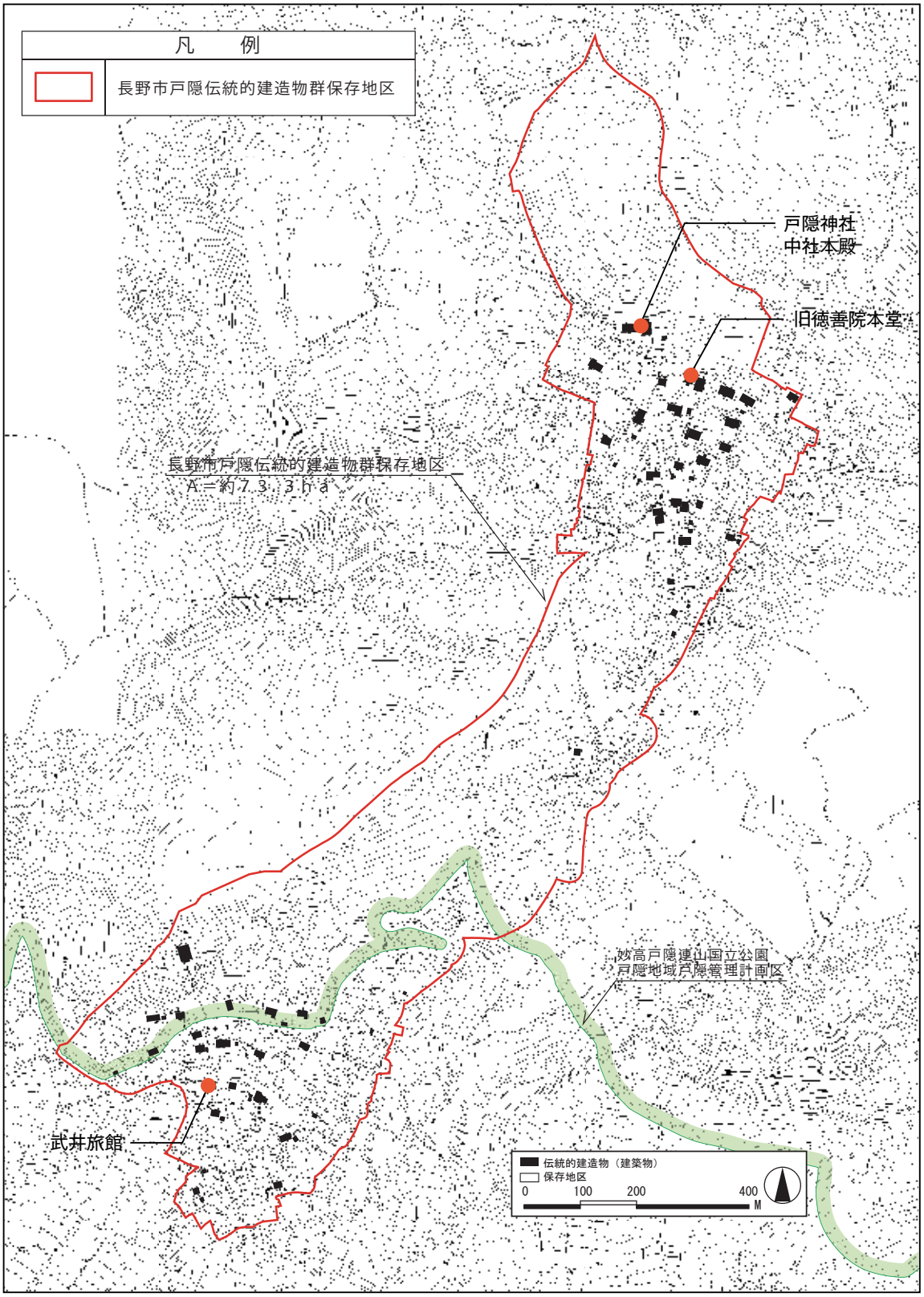
イ　建造物等

（ア）　戸隠伝統的建造物群保存地区

平成29年（2017）２月に重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。戸隠信仰を背景に成立した宿坊群・門前町で、近世において整えられた町割りが良好に残り、その中心には近世

宝光社地区のまちなみ

以前からの営みを守り続ける雄大豪壮な宿坊が群をなしている。宿坊群の外縁には農家や商家が住宅を構えて門前町をなしている。雪に備えて軒を深くとる伝統的な茅葺建物をはじめ、敷地を区画する石垣や生垣、参道沿いに置かれた石灯籠や道標などが歴史的なまちなみをつくり、そのなかで戸隠そば、竹細工、茅葺などの伝統的な生業（なりわい）が営まれている。



a　旧徳善院本堂（極意家神殿）及び旧徳善院庫裏（極意家宿坊）（登録有形文化財）

中社境内に最も近い位置にあり、文化８年(1811)に焼失したが、文化12年(1815)頃に再建された。旧徳善院本堂（極意家神殿）は、木造平屋建、間口６間、奥行５間、平入、寄棟造茅葺、前面に唐破風を有した向拝が付く。旧庫裏（宿坊）は、神殿と直角に配置され、木造二階建、間口11間、奥行７間半、入母屋造茅葺屋根の建物である。

旧徳善院本堂及び旧徳善院庫裏
（文化12年（1815）、登録有形文化財）

b　武井旅館

宝光社門前にあり、棟札から旧客殿部分が延享２年(1745)に建てられたことが判明している。木造平屋建、平入、寄棟造茅葺の建物である。

武井旅館（延享２年（1745））

（イ）　戸隠神社中社本殿

昭和17年(1942)の火災後、昭和31年(1956)に再建(『戸隠－伝統的建造物群保存対策調査報告書』（平成28年(2016)))されたもので、木造平屋建、妻入、入母屋造銅板葺屋根で正面に唐破風を設けた向拝が付く。

祭神は天八意思兼命で、学業成就、家内安全、営業隆昌、開運守護に御利益があるとされる。

中社本殿（昭和31年（1956））

ウ 活 動

(ア) 蕎麦食の文化

戸隠における蕎麦文化の起こりは、平安時代に修験者が携帯食としてソバの実を持ち歩いたことに始まるといわれている。その頃は、そば粉を水で溶いて食していたと考えられている。

現在のようにそば粉を延ばして麺にする食べ方は、蕎麦切りと呼ばれ、史料上では宝永6年(1709)の『奥院灯明役勤方覚帳』に祭礼の際に蕎麦切りが供されていたことが確認できる。また、江戸時代後期には、戸隠へ訪れた貴人をもてなす料理の一つとして、蕎麦切りが本坊や近郷の庄屋で振る舞われていたことが『五十槻園旅日記』(天明6年(1786))から分かる

近代以降になると蕎麦切りは、一般の来訪者にも広く提供されるようになり、明治期末にそば店が中社地区に構えられて以降、観光地化の進展とあわせてそば店も増えていき、「戸隠そば」という呼称が定着していった。

a 戸隠そばの特徴

戸隠そばの特徴は、一本の麺棒を使って蕎麦生地を円形に延ばす「一本棒丸延ばし」の技法で打ち、茹でた麺を冷水で締めた後はほとんど水を切らずにひと口ほどの量に束ねて5、6束を一つの笊に並べる「ボッチ盛り」と呼ばれる盛り付けで戸隠竹細工の笊に盛って、薬味に戸隠おろしという辛味のある地大根が使われるところにある。

戸隠そばの「ボッチ盛り」

また、新蕎麦の時季になると、新蕎麦を提供する目印として、戸隠蕎麦献納祭でお祓いを受けた蕎麦玉が店先に掲げられる。

そば店の軒先に掲げられた蕎麦玉

蕎麦玉は、杉の葉を鼓状に束ねたもので、中央の鼓部分に根曲がり竹を使った竹細工を用いて作られる。多くのそば店では、翌年の新蕎麦の時季を迎えて新しい蕎麦玉を掲げるまで、年間を通して店先に蕎麦玉が掲げられている。

b　戸隠蕎麦献納祭

昭和45年(1970)から始まった戸隠そば祭りでは、白装束をまとったそば職人が、収穫したばかりのソバを使って蕎麦を打ち、戸隠神社に献納する戸隠蕎麦献納祭が執り行われている。『奥院灯明役勤方覚帳』に江戸時代に同様に新蕎麦を神仏へ献納した記述があり、現在の戸隠蕎麦献納祭は、その習わしを踏襲したものとみられている。

蕎麦打ち道具や蕎麦玉などを焚く

令和５年(2023)の第54回戸隠蕎麦献納祭は、お焚き上げが10月31日の夕刻に、新蕎麦献納祭が11月１日の午前にそれぞれ戸隠神社中社で行われた。

献納する蕎麦切りを作る職人

お焚き上げは、中社前広庭で神事を執り行った後に、各そば店で不要になった蕎麦打ちの道具や笊、蕎麦玉などを感謝を込めて焚くものである。

蕎麦切りや蕎麦玉などを献納する

戸隠蕎麦献納祭の当日は、捏ね、延し、切りの工程を３人の職人で一人ひとつ受け持って作った蕎麦切りを神官はじめ、白装束に身を包んだ職人が行列となって神社に新蕎麦を奉納する。

戸隠蕎麦献納祭に用いられる新蕎麦は、７月中旬にそば店の若手職人たちが、自ら種をまいて栽培して、10月上旬に手で刈り取って収穫したものを用いている。

戸隠蕎麦献納祭は、新蕎麦の時季を告げる祭として定着している。紅葉の終わりを迎えて厳しい冬の到来の前、戸蕎麦献納祭でお祓いを受けた蕎麦玉が店先に掲げられるこの時季になると、そば店の前には新蕎麦を味わおうと人々の長い行列が見られる。

（イ） 戸隠竹細工の継承

戸隠竹細工は、江戸時代の初め頃から中社地区の人々の生活の糧として始まり、冬場の手仕事として親から子へ技術と精神性が代々継承されてきた。明治から昭和の中頃には、養蚕の隆盛から蚕籠（かいこかご）等の需要の高まりにより生産量と職人数は最も多くなった。

明治42年(1909)に中社信用購買販売生産組合が組織され、販売価格の下落や仲買人などにより安く買い占められることを防ぐため、竹細工共同販売所の設立や特殊金券の発行などを行った。

大正７年(1918)には、有限責任中社竹細工信用販売組合を設立し、長野市水道事業への水源地提供で得た補償料で保管用倉庫の建設等を行った。その後、戦前から戦後にかけて幾度かの改組を経て昭和34年(1959)に戸隠中社竹細工生産組合が生まれ、現在まで続いている。

a 根曲がり竹の保護

戸隠中社竹細工生産組合では、平成17年(2005)６月に竹細工の原材料の安定確保を図るため、また、乱獲を防ぎながら森を育てていくために林野庁中部森林管理局北信森林管理署との間で協定を結び、黒姫山麓の国有林内に「戸隠竹細工の森」を設けて竹の保護、育成を図っている。

切った竹を干す様子

毎年、旬を迎えたタケノコ採取が盛んになる時季になると、組合では、竹細工に使う材料となる根曲がり竹を保護するため、誤って「戸隠竹細工の森」の根曲がり竹のタケノコが採取されないように監視活動を行っている。監視活動は、筍番（たけのこばん）といって当番制で複数人の班を組み、竹の生育状況の観察もしながら、早朝から森の中を歩いている様子が見られる。

また、竹を切るに当たっては、１年程に育った若竹（わかだけ）を９月中旬から、生育の進んだ造竹（つくりだけ）は10月から11月の雪が降るまでの間と期間を決めて切っている。１日約６束から９束(1束は約50本から135本)を切り、職人相互の約束事として、決して乱獲しないことが守り続けられており、職人は、細工する物や作品、細工に使用する箇所の用途を見極め、必要な量だけを切っている。竹を切る時期になると、切った

竹を作業場前に降ろして、軒先に干す様子が見られる。

戸隠竹細工は、他の産地とともに昭和58年(1983)に長野県知事指定伝統的工芸品となっている。

(ウ) 茅葺の技術と茅場の継承

江戸末期に松代藩の絵師が描いた『戸隠祭礼図巻』(真田宝物館蔵、江戸時代末期)に多くの茅葺建物が描かれており、中社、宝光社地区には、今も茅葺の宿坊、民家が多く残されている。茅葺屋根は、地域住民共有の茅場の茅を住民の共同作業で刈り取り、そして葺かれたとされており、戸隠では明治に越後の茅葺職人富田辰五郎とその弟子たちによって多くの屋根がふかれ、その技術を伝承した職人が茅葺を生業(なりわい)としてきた。『民家巡礼－西日本編』(昭和54年(1979)1月発行)の昭和44年(1969)に記された「戸隠の茅葺屋根」によれば、共有の茅場の茅を交代で刈って葺くとの記述があり、地域ぐるみで屋根材の茅を受け継いできたことがうかがえる。

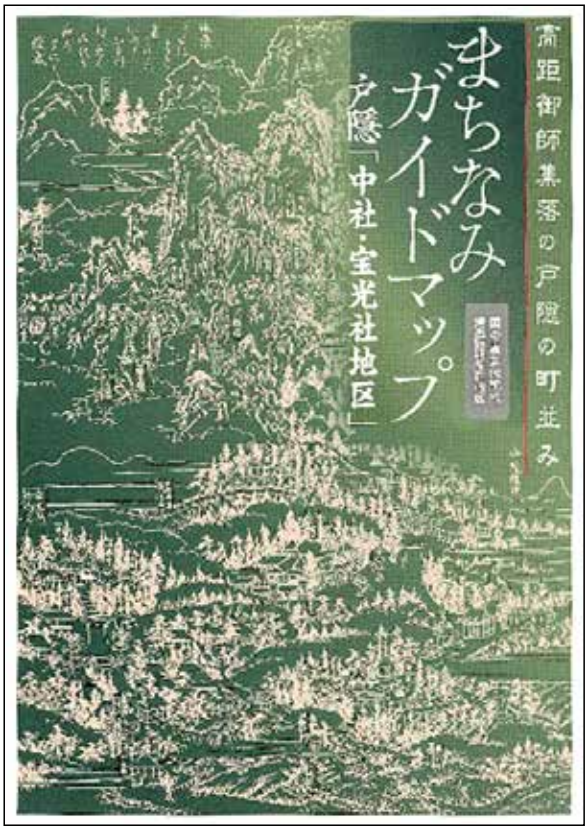
茅葺屋根の修理の様子

茅刈り体験の様子(戸隠スキー場中社ゲレンデ)

高度経済成長期以降は戸隠でも茅葺屋根の上にトタンをふく家が多くなり、茅葺を生業(なりわい)とする職人や茅葺の技術の継承が危ぶまれていたところ、中社、宝光社地区の地域住民によって伝統的建造物群を保存しようとする機運が高まっていき、茅葺屋根の修復が継続して行われるようになったことで、90歳代の職人から移住者である30歳代の職人へ茅葺の技術が受け継がれて古くから地域に根付いていた生業(なりわい)が継承されている。

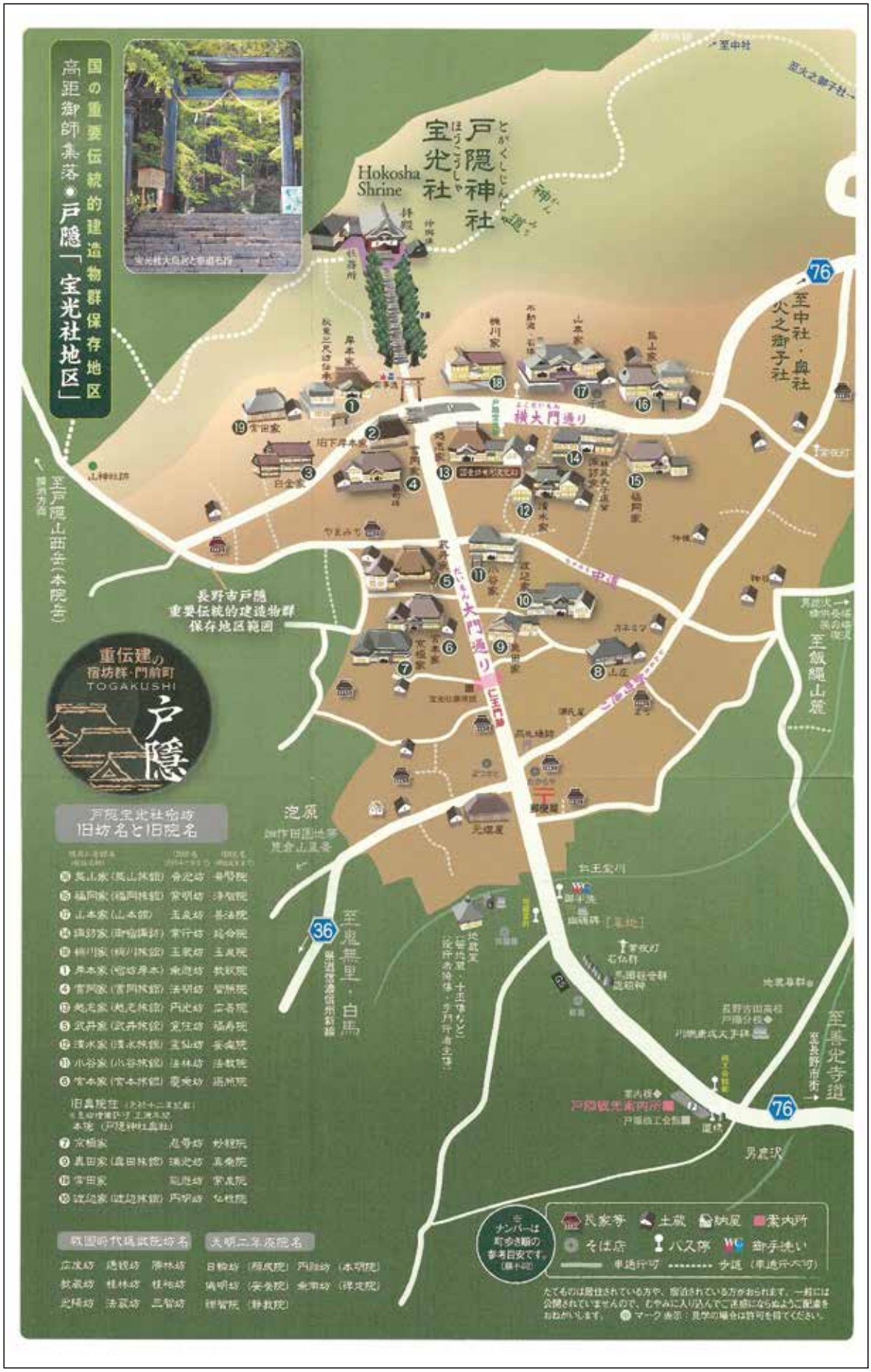
茅刈りの様子

また、昭和40年代まで見られていた共有の茅場での住民共同での茅刈りが一度は途絶えてしまったものの、平成24年(2012)から戸隠スキー場中社ゲレンデを茅場として地域住民が主体となって再開し、地域ぐるみで歴史的なまちなみや環境を守り伝える活動が行われている。



戸隠中社・宝光社地区まちづくり協議会の作成したまちなみガイドブック
宿坊、そば店、竹細工店のほか、民家や土蔵など歴史的建造物を記載している。

中社地区のまちなみガイドブック



宝光社地区のまちなみガイドブック

エ　まとめ

戸隠には、寒冷多雪という気候風土を反映して特有の技術が育まれ、その技術を生かした伝統的な生業（なりわい）が地域の人々の手により受け継がれている。

宝光社地区にある県立高校の分校に全国的にも珍しい「そば部」があり、地域のそば職人が講師となって生徒は日々そば打ちの技術を磨き、全国高校生そば打ち選手権大会で優れた成績をおさめている。また、戸隠そば協同組合では、長年にわたり戸隠そばのブランド確立に向けて取り組んでいる。

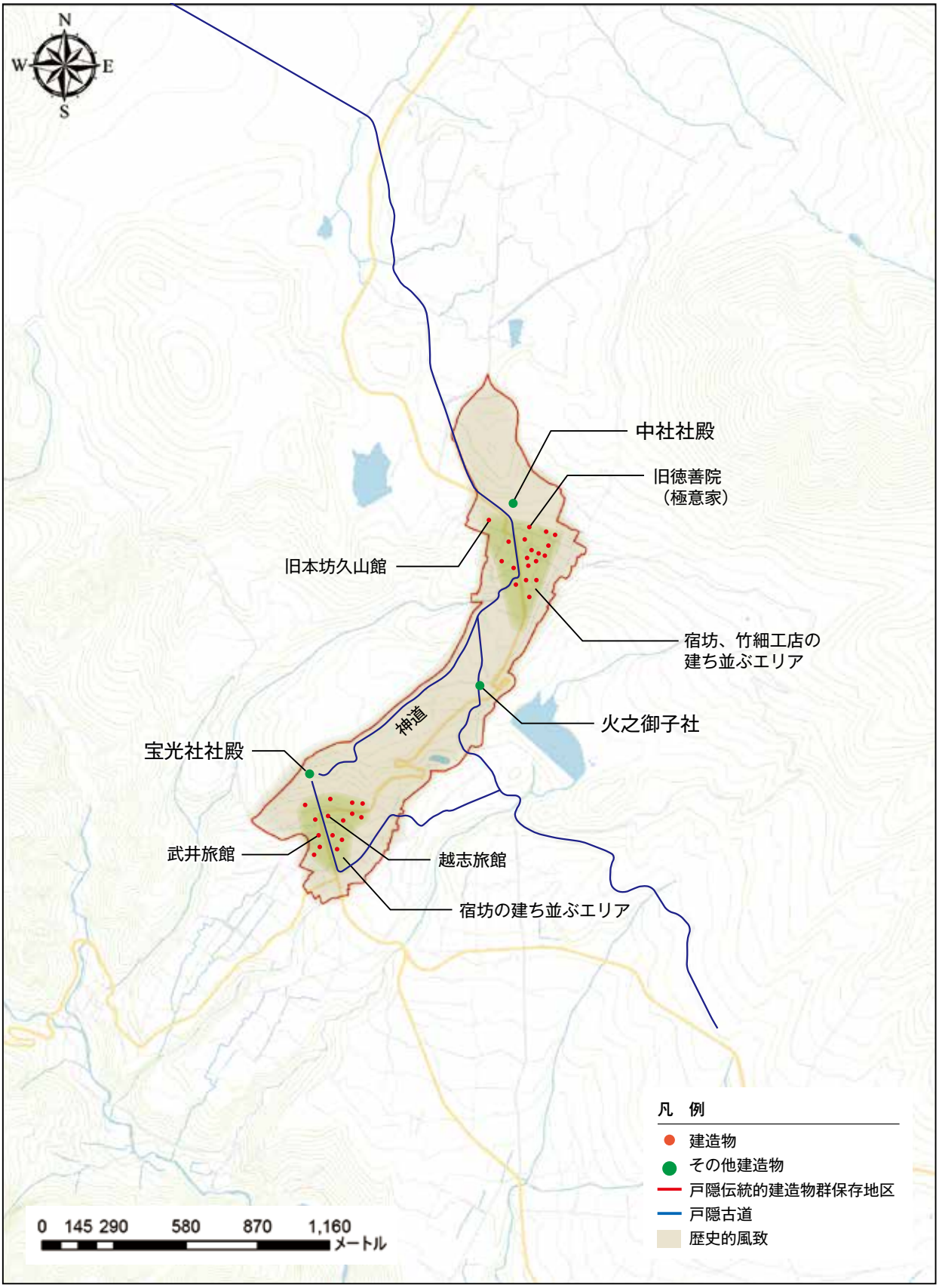
戸隠中社竹細工生産組合では、原材料となる竹を安定的に確保するために森を守る活動のほか、竹細工の魅力を知ってもらえるように体験教室や展示会の開催などに取り組んでいる。

そのほか、地域資源を活用するとともに、歴史的な景観を維持する共感の輪を広げようと住民が主体となって宿坊などの茅葺き屋根の補修や葺き替えに使う茅の刈り取り体験を地区内のスキー場で開催したり、茅刈で集めた地域の茅が使われている様子を知ってもらえるように伝統的建造物の修理にあわせて茅葺ワークショップを開催したりしている。

戸隠の風土に息づいたこれらの生業（なりわい）は、多くの来訪者を迎え入れ続けている中社と宝光社地区の宿坊群、門前町の歴史的まちなみと一体となって根付いており、良好な歴史的風致をみることができる。

中社のまちなみ

宝光社のまちなみ



戸隠の伝統的な生業にみる歴史的風致の範囲図（S=1/20,000）

COLUMN

【戸隠の伝説】

天の岩戸神話と戸隠山

昔、世の中を明るく照らす天照大神（あまてらすおおみかみ）が弟の素戔嗚尊（すさのおのみこと）の乱暴を怒り、天の岩屋へこもってしまいました。世の中は暗闇になり、いろいろな魔物が暴れ放題です。困った神々が集まり、天照大神になんとか岩屋から出ていただこうと知恵を絞り、岩戸の前で舞うことにしました。天鈿女命（あめのうずめのみこと）のみごとな踊りにつられ、神々は笑い出しました。その騒ぎが気になって、天照大神が少し戸を開けて外を見たとき、すかさず天手力雄命（あめのたぢからおのみこと）が岩屋の戸を開け、勢い余った岩戸は、はるか信濃の戸隠山へ。以来、世の中は明るくなったといわれています。

長く山岳信仰の地として知られてきた戸隠には、このほかにも伝説や古くからの言い伝えが残されています。